

# 指示語・接続語

◆指導ページ P.3～8◆

### 【指導のポイント】

説明文は筆者の主張を明らかにするものであるから、結論に至るまでの論旨がわかりやすいもので、明確でなければならない。指示語・接続語はともに、前後の関係を明らかにし、筆者の主張が読者に理解しやすくする働きを持っている。ここでは、国語の文章題の読解に欠かせない指示語と接続語の問題の解き方を理解させたい。

### 演習問題A 1の板書例

人間にとって大切なこと

← 体 〓 生命

← 人間らしく生きる 〓 ことば

← 人 ↓ ことばを使いこなす ↓ 文化を築く

人 ↑ 動物 〓 ことば・火・道具

日本人 〓 「ことばを大切にする気持ち」

↓ ほかの国の人と比べて強くない

理由： 「鎖国 ↓ その国の人と接触をもたない期間が長かった」

結果： 「ことばに対する意識 〓 育たない」

← 私たち日本人のことば 〓 日本語

← さまざまな国 ↓ 日本の文化に入り込む

← 改めて「ことば」を意識する必要

**重要語句**

- らしく 〓 「いかにもよくふさわしく」の意味。
- 鎖国 〓 外交や貿易をきびしく制限した江戸幕府の政策のこと。
- 接触 〓 人やものなどふれ合うことや、ものごとについて交渉すること。

### 演習問題A 2の板書例

話題・問題

日本 〓 環境破壊の温室効果ガス 〓 二酸化炭素

↓ 一番多い 〓 一般家庭 ↓ 電力消費が大きい

〓 エネルギー消費が多い

← なぜ、一般家庭のエネルギー消費が大きいのか

理由 ↓ 個人消費が大きい

↓ 消費が経済を動かす 〓 世界

↓ 二酸化炭素を大量に排出 〓 地球 〓 壊す

大量消費 ↓ 大量のゴミ

↓ ゴミ処理の問題 ↓ リサイクルには手間・費用

「生の材料を使う 〓 コストが低い」

← 「リサイクル名目 〓 放置されたものを生む」

筆者の主張

今の世界

〓 「消費で経済をすすめる」か「地球を壊すか」

↓ 「経済 ↓ ピーク」

〓 「大規模 〓 消費」 〓 「地球を壊す力」

**重要語句**

- 温室効果ガス 〓 地球に温室効果をひきおこすガスのこと。二酸化炭素やメタンなど。
- 消費 〓 金銭やエネルギーなどを使ってなくすこと。
- リサイクル 〓 この文章で使われている意味) ゴミとされたものを回収して、改めて資源として利用したり、再び使用すること。

### 演習問題Bの板書例

人 〓 言語を持つこと ↓ 人間

言語 〓 一つ一つの言葉から成る

↓ 壮大な思想をつくりあげる

〓 言葉は単なる材料ではない

〓 煉瓦に似ている

↓ 煉瓦と違う 〓 一つ一つの意味が異なる

← 言葉が人間社会に存在するまでの手順

〓 自然界の作用・人間の動作・ものごとの性質や状態

↓ 名前をあたえる

↓ 社会的な対象

↓ その言葉が必要なもの 〓 社会での生存権

例 〓 春夏秋冬 ↓ 春と夏の区別のないところ

〓 春と夏を分ける言葉がない

↓ 観念が社会的に成熟しないところ

〓 その観念を表す言葉が社会に存在しない

例 〓 馬・雨 ↓ 社会で必要とされるもの

〓 言葉が豊富

↓ 社会に特定の物や観念がない 〓 言葉がない

例 〓 日本語と英語を比べる

〓 「タテ」「ヨコ」・「シブイ」

物事の捉え方 〓 社会に独自の型

↓ 言語の上の習慣として伝承

↓ 言葉 〓 社会の構成員のもの 〓 把握の仕方 ↓ 規制

言葉

〓 「社会の状況や社会の人々の判断・感情・感覚」

〓 反映

**重要語句**

- 壮大 〓 ものごとの規模が大きく、りっぱな様子。
- 独自 〓 この文章で使われている意味) 特有。そのものだけがもっている性質やことごら。

2

段落相互の関係

◆指導ページ P.9～14◆

【指導のポイント】

内容ごとに形式段落が区切られている。形式段落には、内容のまとめや中心となる文やことがらがそれぞれにある。形式段落がさらに意味のまとまりから意味段落に区切られる。接続語や指示語に注意して、形式段落のつながりを把握することで、意味のまとまりを理解する。意味段落の関係から、文章の構成をとらえて、結論の段落を見つける。

演習問題A 1の板書例

●弱点を補おうとする時  
普通の場合 ↓ ほかの能力で補おうとする

●一流の方々  
★「落語家・講談師・司会者」の例  
★清水選手の例

●弱点を克服 ↓ 余人には及ばない領域に達する  
↓ 強化学習のメカニズム

●弱点 ↓ 努力 ↓ 克服 || 高いモチベーション  
|| 「ドーパミン ↓ 脳の強化学習」  
|| マイナス ↓ ゼロ ↓ オーバーシュート

●克服したいという願望  
|| ドーパミンによる強化学習  
↓ 加速 ↓ 卓越した領域

重要語句  
○克服 || 努力して困難なことを解決すること。  
○余人 || ほかの人。  
○卓越 || ほかのものとは比べて、とりわけて優れていること。

演習問題A 2の板書例

猿社会 || 順位制 ↓ 人間に順位  
|| 強いものをバックにしていばる

人に飼われている猿の場合 || 問題  
↓ 人が餌を与える ↓ 猿はよるこんでもらう  
↓ 一番の人が来る  
↓ 餌を与えた人にとびかかる || 君子豹変  
← 人から餌をもらう

猿の気持ち || 「心ならずおべっか」  
↓ 「飼主 || 一番の人」があらわれる  
↓ 高圧的になって餌をうばいとる  
|| 猿にとって自然な行為

猿の脱走 || 猿の気持ちがわからない人間  
↓ 猿が人を咬む || 社会問題  
↓ 脱走猿 || びくびく ↓ 飼主が現れる  
↓ 「猿 || プライドが頭をもたげる」  
|| 「虎の威を借る猿」

重要語句  
○君子豹変 || 意見や主張が全く違うものに、急に変わること。  
○高圧的 || 相手に一方的に自分の意見などを押しつけて、相手を従わせようとする態度や様子。  
○プライド || 誇り。  
○虎の威を借る猿 || 人の権力や勢力を頼り、いばること。

演習問題Bの板書例

1 森林の土... やわらかい  
↓ 通気や水の通りがよい構造

2 森の草や木が根を張る  
↓ 土壌は維持され水を蓄えることができる  
森林の役割の一つ

3 木々によって、雨がじかに土壌に打ちつけない  
↓ 雨がしみこむ ↓ 地下水が枯渇しない  
もう一つ重要なこと || 土壌による水の浄化機能  
森林の木を切る ↓ 海の生物が死んでしまう

6 陸上... 生物が栄養素をリサイクルしながら生きていく  
← 陸上 || 栄養素を蓄えておくことができる蓄積型の生態系  
← 植物を分解してえられる有機物の蓄積によって土壌をつくりあげている

7 海洋の生態系 || 食物連鎖による循環  
← 一方

8 海、森、山、川とそれぞれの場所に棲む生物  
↓ 水と栄養とエネルギーの壮大な循環システム

9 生物... 種どうし、無関係に生きていない  
← 食物「連網」 || たがいに依存しているような関係

11 相互関係にある生物どうし || 共生  
・ 一方的に相手の種に依存 || 寄生  
・ 物質が循環する大きな関係

12 生物... 複雑で多様な関係を結び  
↓ 多くの種に分化

重要語句  
○攪拌 || かきまぜること。

【指導のポイント】

話題について、筆者が読者に伝えたいことが要旨である。説明文の文章構成は、三つのタイプがある。一つめは頭括型で、初めに要旨、その後、後に要旨の内容の説明が続くタイプ。二つめは尾括型で、説明の後に、要旨が述べられるタイプ。三つめは双括型で、最初に要旨、次に説明、終わりに再び要旨が述べられるタイプ。いずれのタイプにせよ、要旨は話題に対する筆者の答えが述べられている。

演習問題A 1の板書例

話題

●日本の青年⇨無表情⇨石像のような無表情

↓「表情⇨文化の違いによる」

⇨(例)客家⇨ここにこしな文化

⇨国際化時代⇨いろいろな文化と出会う

⇨愛想が悪い表情⇨失敗することが多い

提案

●相手に出会えてうれしいという気持ち

●「ありがとう」という気持ち

↓少しでもにっこり

⇨表情の違いがあたたかい雰囲気

⇨表情に関心をもってもらいたい

重要語句

○愛想⇨人に接するときの態度や表情。

○雰囲気⇨特定の場所にいる人たちがつくりだす気

分のこと。

演習問題A 2の板書例

話題

人間と水

●人間⇨水を飲みつづけなければならぬ

動物⇨まとまった水が、毎日のように必要

●水⇨人間が生きていくうえで、飲料用のみならず、

清潔さを確保するのにも不可欠

人間⇨快適な生活をしようとすればするほど、水を大量に消費

●人間の集落⇨水の得やすいところにつくられる

⇨水の確保⇨人間にとって死活問題

●人間⇨防衛のためにも清潔さのためにも、高く比較的乾燥した土地に住居をかまえない

⇨しかし

⇨流水を引きにくい

⇨井戸をほる⇨水を得るため⇨絶対ではない

⇨地下水がなければどうしようもない

●日本⇨きわめて地下水に恵まれている

⇨世界的にまれなこと

重要語句

○濾過⇨液体や気体をこして、ごみなどをとり除く

こと。

演習問題Bの板書例

話題

●時間とはなにか?

↓一般的なとらえ方

⇨社会的な約束ごと⇨社会はスムーズに動く

⇨時間のとらえ方

●異なる意味をもつ時間

↓「死」を告げられた人⇨時間は引き算

⇨他の人と異なる速度

⇨約束事ではない⇨世界の終わり

⇨自分の死が遠くない

⇨自分だけの時間⇨他の人と別種の時間

⇨「同じ時⇨二度と訪れない」

⇨時間についての別種のイメージ

⇨「一定の時間でくりかえす」⇨永遠に続く

⇨年中行事

⇨正月・煤はぎ・春の彼岸・秋の彼岸

⇨循環する時間

⇨筆者の考え

●「二度と訪れない時」と「循環する時間」

⇨二種類の異なる時間のイメージ

⇨人⇨組み合わせる人生を過ごす

重要語句

○年中行事⇨一年の中である時期に行なわれること

とされている行事のこと。

○循環⇨くりかえしおこなわれること。

4

事実と意見

◆指導ページ P.21 ~ 26 ◆

【指導のポイント】

論説文では、事実や実例にもとづいて、筆者の意見が述べられる。事実と意見が段落単位で明確に区別できないときは、一つ一つの文を分類することからとりくむ。数値や引用、実例に注目して事実を読み取る。

演習問題A 1の板書例

筆者の考え

●「ことば」を使うということ

|| 語彙や語法を選ぶこと ↓ 選択の基準  
|| 個々人の信念 || 個性

●「ことば」が意味を変えてしまう || 残念

他の人の意見・考え

●「ことば」が意味を変える

↓「ことば」は生きものだからだ。

筆者の考え

●「ことば」に生命はない

↓生きているのは「ことば」を使う人間

|| 使い方によって「ことば」は変化

↓みずからの責任で「ことば」を使うこと

|| 大切

重要語句

○語彙 || ある人や小説や論文などで使われている単語の全体のこと。

語の全体のこと。

○語法 || ことばの使い方や表現方法。

演習問題A 2の板書例

●美しい森との出会い ↓ 天然林・人工林

|| 「私」を感動させる森

美しいと感じさせる森には何があるか？

●美しい森 || 豊饒な森の生活

↓森と時間の関係から生まれる || 蓄積された時間

|| 「古木 ↓ 倒れ ↓ 土に環る ↓ 再び森をつくる」

|| 否定されない森

|| 過去の時間が積み重なった森

●人間の時間 || 過ぎ去る時間 || 過去の否定と清算

↑ ↓ 身勝手 || 人間が美しいと感じる森

|| 過去の時間の上にある森

重要語句

○豊饒 || 土の養分などが豊かで、作物などが多くなることやその様子。

○清算 || 金銭の貸し借りや、過去の関係を解消すること。

演習問題Bの板書例

●渾身 || 失われたつある言葉

|| からだ全体の力を一点に注ぎこむ

↓ 身体感覚と技

●渾身の意味

|| 「混雑や渾然や雄渾」の意味を含んでいる

|| 似た意味 || 満身 || 力強い身体感覚

↓ 渾身が死語となりつつある背景

↓ 「からだのエネルギーを一点に集中させる身体経験

|| 状況 || 激減

|| 精神的な面で全力を出し切る状況

|| 実際の身体感覚と異なる

●現代社会 ↓ 肉体的な意味の渾身

|| 少なくなった

↓ 精神的な意味の渾身 || 必要性は変わらない

|| 渾身という言葉の持つ力

|| 事を成す力が変わる

|| 一点に集中して注ぎこむ心身の構え || 誘導

●渾身 || 技 || 練習によって可能

|| 腰の構え・呼吸法

|| 教育により伝承

|| 身心の文化

重要語句

○満身 || からだ全体。

○誘導 || 人やものなどを、目的とする場所に誘って導くこと。

○伝承 || 受け継ぎ、伝えていくこと。

5

段落の要点・構成

◆指導ページ P.27～32◆

【指導のポイント】

段落の要点を読み取り、段落相互関係・文章の構成をつかむ。話題提示、展開対比、結論などの役わりをはたす段落がある。一つの形式段落が二つ以上の働きをもつことも多い。論説文の文章構成は、本論があり、その後に結論が置かれる型と、はじめに結論を置き、その後に本論が続く型などがある。

演習問題A 1の板書例

教師↓情報↓生徒⇨徹底しても「情」がなければ問題

①「情」を伝えるにはどうしたらいいのか？

②「私」の体験↓中高一貫校の教師

⇨コミュニケーションで悩まなかった

↓「自由の場」があった

③今の学校⇨「自由な場」の共有体験が少ない

↓会議以外に共有の場がない

⇨会議以外の場に共有をつくる

⇨争いをなくす⇨無用の争いが減る

↓結果⇨時間の節約

④コミュニケーション⇨「聴く」こと⇨大切

重要語句

○共有⇨一つのものを、複数の人が所有をしたり、使用したりする状態のこと。

○無用⇨（この文章で使われている意味）役に立たない。利益のない。

演習問題A 2の板書例

話題

●大和の寺をめぐる歩く

⇨解説書や美術書を読む⇨眼の問題

●「私」⇨自分の直接的な眼を養いたい

⇨原始の意味を知りたい

●美術書より歴史書がよい

●大和⇨歴史⇨生き生きと感ずる

⇨当時の人間の念願を知ること⇨大切

筆者の考え

解説や美術書は無用ではない

⇨美術書の知識過剰⇨眼の衰弱・心の衰弱

⇨仏像の前⇨先入観を捨てること

⇨真剣勝負の世界

重要語句

○大和⇨（この文章で使われている意味）今の奈良県にあたる地域の古い国の名称。

○先入観⇨あること（先入観）に対してあらかじめ持っている固定した考えや見方。

演習問題Bの板書例

話題

●人が行動を起こすとき⇨失敗のイメージを持たない結果⇨多くは失敗

⇨最初から失敗のイメージを持って行動する⇨大切

⇨失敗後の対処⇨うまくいく状況のもとで動く

⇨「べき」「はず」で動く⇨根拠はない

⇨自分⇨窮地に追い込む

問題の提示と展開

なぜか？

⇨失敗のショック・ダメージの大きさ

⇨計算に入れない

⇨失敗に正面から向き合えない

⇨失敗に正面から向き合うことは不可能だ

⇨失敗と向き合おうと頑張る

⇨無理矢理エネルギーを絞り出す⇨潰れてしまう

⇨エネルギーがない⇨出すことをしる

⇨励ますこと⇨逆効果

筆者の考え

周りの対処⇨エネルギーが回復するのを待つ

⇨失敗後の対処

⇨エネルギーを失ったとき⇨失敗に立ち向かえない

重要語句

○向き合う⇨正面から互いを見る。

○逆効果⇨あること（逆効果）について、期待したことは反対の結果がでること。

【指導のポイント】

論説文の価値は、筆者の意見や考えを、いかに筋道を立てて述べるかで決まる。筆者の意見や考えの根拠や理由を述べた部分を本論という。筆者の意見や考えを述べた結論部分を論旨という。論旨の内容を読み取るには、読者に対して訴えているところや、強い断定表現に注目する。

演習問題A 1の板書例

●日本人↓・利巧

・柔軟な考え方  
・異国文化を再生産

↓日本の文化の素地が高かった+日本人優秀

●日本人の生活技術⇨西洋と同じではない

★日本人の自然に対する考え方

⇨自然を理解・順応⇨幸福

↓災害などのとき⇨西洋の考え方をこえた

★西洋の文化を低く見ることは誤り

↓西洋と日本には過去に同じ形の科学がなかった

⇨両者は調和⇨世界人類の幸福に利用

●日本人に改めて求められること

⇨理由のない劣等感や意味のない優越感をなくす

⇨公平に自分を知ることが大切

重要語句

○素地⇨この文章で使われている意味)基礎。

○優越感⇨他の人と比較して自分の方がすぐれているという感情。

○劣等感⇨他の人と比較して自分の方がおとつているとい感情。

演習問題A 2の板書例

●地球⇨多様な生命体が存在⇨ヒト⇨生命体の構成要素の一員

「ヒト」から「人」へ変化⇨文化を創出

「人」⇨自然と対立⇨他の種と対立

⇨生命体の一員としての側面を完全に失っては  
いない

●地球上の生命体⇨数多くの生命体が複雑+相互関係  
生態系の崩壊⇨生物の種の絶滅⇨閾値を超える

⇨多様性が下がる⇨崩壊

地球上の生命系

⇨崩壊の条件・程度⇨わかっていない

⇨一定のレベルを超えると崩壊する

重要語句

○生態系⇨ある特定の区域の生物とそれを取りまく環境と一体のもの

○閾値⇨あることさらに変化がおこさせる最低の刺激などの値。

○生物多様性⇨さまざまな種類の生物が存在する状態。

演習問題Bの板書例

●上達がうまくいかない

⇨エネルギーがあまって悶悶とする

⇨エネルギーがあまる⇨エネルギーの燃焼が問題

⇨心身のエネルギーバランスを保つ⇨最重要課題

●中途半端なエネルギーが残る⇨不安

「小人閑居して不善をなす」

⇨余ったエネルギーの使い方がわからない

⇨気がゆるむ⇨目的がなく行動⇨不善をなす

⇨エネルギーの燃焼をさせる方策⇨知恵がいる

●人間のエネルギー問題の解決のための方策

⇨「上達」

「上達」にはエネルギー消費が必要

⇨充実感⇨王道

「私」の経験⇨運動の上達には膨大なエネルギー

⇨運動をやめる⇨ノイローゼ気味

上達のおもしろさ

⇨自分の技になること⇨自分の充実

膨大なエネルギーに使用⇨上達の体験

⇨自分の「抛り所となる体験」

重要語句

○不善⇨良くないこと。

○王道⇨ものごとを成しとげる最も近い道すじ。

○抛り所⇨頼みとすることがら。

7

1・2章のまとめの問題

◆指導ページ P.39～42◆

1の板書例

① 最も進化している昆虫「アリ」

② 「アリ」やハチ

「社会性を発達させ、集団で生きる」

← 階級・役割分化 生存率がかなり高まる

← 本能が発達

複雑な役割分担の仕組みを本能でコントロール

③ 「アリ」ハチからさらに進化

← 飛ぶこと…多大なエネルギーを必要

集団生活と地中生活

↓ 敵から逃れるための無駄な羽を省くことを可能に

④ 「アリ」無脊椎動物の進化の頂点

← 人間と「アリ」は全く違う道ながら進化の頂点を極めた

人間「他の野生動物を圧倒」

昆虫界では「アリの強さも他を抜きこんでいる」

⑤ 人間「他の野生動物を圧倒」

← 昆虫界では「アリの強さも他を抜きこんでいる」

↓ 「アリ」の攻撃を避けるために進化

⑥ 例 アシナガバチやスズメバチ

↓ 「アリ」の攻撃を避けるために進化

⑦ 例 軍隊「アリ」の行進の前には、人間さえも避難することしかできない

重要語句

- 無脊椎動物「体の中軸としての脊椎をもたない動物群」
- 忌避物質「匂いや味などを嫌って有害動物などが近寄らないようにするための物質」

2の板書例

世界には様々な文化が存在

● 他者を理解するためにコミュニケーション

↓ 「生きる意味」の世界を豊かにする

● 効率の悪いシステム↓「生きる意味」の理解

↓ コミュニケーションの効率がよくない

← 効率の悪い点を解決すること「数字信仰」

↓ 多様な文化を超えることができる

「効率的」「グローバルイズムが依拠

↓ 瞬時にコミュニケーション

← 数字「誰にも通用する」「誰の意味にもならない

「皮肉な結果

↓ 「収入の数字」「幸せの度合い」

「生きる実感がない

「自分の大切なものが置き忘れられる

重要語句

- 効率「あることごとについて、使ったエネルギーなどに対する手に入れた成果の割合
- 皮肉「この文章で使われている意味」あることごとについて期待したことと、反対の結果になること。

3の板書例

● かくれんぼ

不安・孤独・恐怖↓探索↓絶対に見つかるはず

↓ 見つける↓安心の世界

● 孤独感+それから抜け出すスリル+元の世界にもどる

「精神の興奮と弛緩

↓ 人生の死と再生のさまざまなモデルの雛形

「人生の疑似的体験

● 児童文学

「行って帰って来る」構造↓テーマ「家出」

↓ 人生の構図「不安と闘う・冒険・安心の世界

親子関係「究極の「安心」のモデル

↓ 孤立・恐怖・克服・勇気

↓ 人生の基本形「遊び」疑似的体験

↓ 人生を上手に生きぬくシミュレーション

● 「遊び」人生の雛形↓遊びの特性「本番と違う」「楽天性」↓やり直し「遊びの本質

実際の人生「失敗の連続

↓ 上手に遊ぶことができる

「人生の失敗も上手に乗りこえることができる

失敗とやり直し「遊び」人生のシミュレーション

重要語句

- 疑似「あることごとをまねること」
- 雛形「この文章で使われている意味」模型。

8

あらすじ・場面・情景

◆指導ページ P.43～48◆

【指導のポイント】

問題文にとりあげられた文章に描かれた出来事の流れを大きくつかんだものがあらすじである。あらすじを理解するためには、人物と物語の背景、出来事をしっかりおさえる。その上で場面の变化から、物語の展開を読み取る。場面の变化は、「時間」「場所」「人物」「出来事」のいずれかが変化している。そうした場面の内容の読み取りには、登場人物の心情が反映した情景に注目することが重要である。

演習問題A 1の板書例

- 登場人物⇨河童・ゴム丸・手嶋・脩
- 出来事⇨鳳凰池⇨野生のペンギンの観察⇨自由研究の課題
- 場所⇨雨の降る鳳凰池

脩⇨観察係

★「手嶋⇨テントの中⇨笑い声」

⇨遠くに感じられる

⇨「国道のクラクションの音・雨の音」

⇨するりと通り過ぎる感じ

⇨ほかのすべてのものから切り離された気分

★マペン・パペン(ペンギンの名前)

⇨必死に生きる姿⇨野生を感じる

感動⇨子育てに成功してほしい

重要語句

- 営巣⇨産卵のためにつくった巣をつくること。
- 目頭⇨めもと。鼻に近い目のほし。

演習問題A 2の板書例

梨花⇨速達を出しにやられる

●小路⇨まだ朝がさめやらない

●電車通りの店々⇨しごと⇨油がのる⇨活気

●橋のたもと⇨トラックにひかれた錯覚

⇨硬貨を落とす

●財布を持っていない

⇨お金がないので速達が出せない

⇨用事が足せない⇨こまる

●靴みがきのおばさん⇨十円を貸してくれる

⇨助けてくれた⇨ついでのときに返してもらおう

●大人の対応

●すき腹にこたえる⇨感心させられる

重要語句

- 油がのる⇨この文章で使われている意味(作業や仕事などの調子がのる様子)。
- 靴みがき⇨この文章で使われている意味(職業として靴をみがいている人)。

演習問題Bの板書例

- 登場人物⇨僕(江戸)、花田
- 場面⇨船着場のそば⇨神社

連絡船が出発⇨雨が上がり、蟬が鳴きはじめた  
僕ら⇨頂上を目指した

⇨今夜は野宿しなければならぬ

⇨神社へたどり着いた

たどり着くまでに蛭が十匹⇨心強い⇨不安

⇨花田⇨真面目な表情

⇨神社：荒れているが、何かの気配に満ちている⇨怖い

⇨何か、心をさわがせるもの  
妙な感じ

僕⇨神鈴を鳴らした⇨いやな余韻を消したい

⇨拝殿の中で何か<sup>が</sup>動く気配がした⇨不安・怖い

⇨いくつもの何か

⇨拝殿の扉が開く

⇨鹿が鼻先で扉を押し開こうとしていた

⇨大きな角のある鹿・何匹もの鹿

僕⇨花田に向かって倒れかかった

⇨「なんだ」：何か<sup>が</sup>わかって安堵⇨脱力

重要語句

- 眺望⇨見晴らし。広く遠くまで見晴らすこと。
- 揺すぶった⇨ゆさゆさとゆり動かしたこと。



【指導のポイント】

事実部分に描かれている事件やできごとに対する登場人物の気持ちや思いが心情である。心情を直接的に表現した語句に注目する。次に、会話や表情などを表す語句に着目する。さらに、情景に感情が反映されているので、情景の描かれ方を読み取る。

演習問題A 1の板書例

● ひさしの目にはそれぞれの将校の乗る馬はいつも決まっていた

● 刀よりも馬のほうに興味があった

↓  
・目：やさしい  
・前肢後肢：複雑な動き→怖い→すばらしい

● 畳の上に四つん這いになり、馬と同じように歩いてみようとする

↓ ひっくり返ってもひっくり返っても繰り返してみる  
↓ 手足をばたつかせて笑う→楽しい

● 毎日、三頭の馬を間近に見られること

⇨ ひさし ↓ いきいきとさせた

● 学校で馬の絵を描いた

↓ クラスの他の誰がかく馬とも違って生きている  
↓ 図画の先生 → よく賞めた

新聞社主催の図画の展覧会に出品して  
特賞

⇨ ひさし ⇨ うれしくなくはないが、賞に対して格別の

執着はない

賞より馬

重要語句

○ 将校⇨軍隊で、戦闘の指揮をとる士官。

○ 執着⇨強く心ひかれ、それにとらわれること。

演習問題A 2の板書例

● 新聞が完成した  
↓ ハジメに見せるだけ

● 四人そろって、体育館へ見せに行く

↓ ハジメ⇨バスケット部のコーチ  
一回つきかえされている  
↓ みんな⇨緊張

● ハジメ⇨教室で、チョークをにぎっているのは、ベ

つのがた

秋江⇨学校新聞をわたした

先生(ハジメ)⇨タオルで手をふいてから、うやうやしく受け取り、まじめな顔で読んだ

秋江⇨つばをのみこむ・心配そうに⇨緊張  
功一⇨にぎりこぶし・ボクシングのまね⇨緊張  
由加⇨バスケット部の友だちに手をふっている

● ハジメ⇨読むにつれて、目がだんだん細くなる

↓ 喜び・満足  
読み終わったところで、四人をよぶと、ひとりひとりの顔をゆつくりと見まわした

↓ 前よりずっといい  
⇨ 「やったー」

秋江と由加⇨とびあがる

祥太と功一⇨目をかわす  
↓ 喜び

重要語句

○ うやうやしい⇨礼儀にかなって丁寧な様子。

演習問題Bの板書例

● 「最後に予定外のプログラムですが、牡羊座の説明をします」  
わたし：あ⇨驚き  
わたしの星座

● 実際に星の並びを見るのは初めてだった

↓ かなりの地味さにつかりした  
・牡牛座くらい派手な星座がよかった  
⇨ わたしの心を見透かすように  
残念

● 「たとえ見かけは地味でも、本当はすごい星座」

たつたひとり(わたし)に向かって話しかけていた

● 「牡羊座は富の象徴なので、将来大金持ちになれる」

↓ わたし⇨笑い出しそう・誇らしい気持ち(優越感)  
● 「年に一度、大きな流星群の基点になるんです。昼間に流れるので、目には見えていないだけ。たとえ星座自体が地味でも、流星群は見えなくても、そのすばらしさを僕はちゃんと知っています」

わたし

● よく地味な方だと言われる

↓ 「加地はなにを言いたいのだろうか」…疑問  
流星群を流れ星マシンで見せてくれた  
↓ 見事な光景↑わたし：うわあ⇨驚き・感動

加地

● 「たとえ見えなくても、こんなふうに美しいって、僕はちゃんと知っています」

わたし

● 顔が熱くなってきた⇨うれしさ・感動

重要語句

○ 牡羊座⇨魚座の東、牡牛座の西にある星座。

○ 天球⇨観測点から眺めた、半径無限大の仮想の球面。

【指導のポイント】

作品を通じて、作者が読み手に伝えたかったことが主題である。中心人物の気持ちの変化、事件やできごとにおける行動から中心人物の性格や考え方を読み取る。とりわけ「ヤマ場」の心情を読み取る。そうした中心人物の心情変化に作者の思いや考えが表現されていることが多い。

演習問題A 1の板書例

●準備体操が済んだころ  
↓残りの部員が集まって来た  
・三宅、鶴永、石原  
↓大学からテニスを始めた  
・星野祐子  
↓ベテラン選手だが、一年間の条件付き  
温和しい顔立ち・やさしい気稟・仲間  
から大切に扱われている

●金子の指示でそれぞれが散った  
↓秋の新人戦が間近に迫っていた  
←  
誰もが、インカレと呼ばれる大会に出るのが夢  
＝ 難しい

●療平⇨シングルの試合をするのが好き  
↓ひとつ一つのポイントを重ねて、マッチポイントに近づいて行く作業  
⇨唯一の昂揚  
追い込まれても一種の挫折感を伴った、不思議な快さを合わせ持つ緊張

●療平⇨どんな相手であっても、勝つということは難しい  
↓烈しい練習で知った  
←  
療平を変えた  
⇨積み重ねていく執念のようなものが生じた  
慌てても、焦っても、マッチポイントは近づいてこなかった  
←  
取ったり取られたりしながら、たんと積み重ねるしかない  
←  
療平⇨あらゆるものが、  
同じ原理であること知った

○檜舞台⇨自分の腕前を表す晴れの場所。  
○昂揚⇨精神や気分などがたかまること。

**重要語句**

演習問題A 2の板書例

「私」と「息子・岳」との会話  
←  
「私」⇨三日後にシベリアに行く  
息子・岳とキス釣りのあと、食事  
←  
「私」⇨深く考えることもなく「岳」に質問する  
将来何になるつもりか？

「岳」⇨あまりこの会話に乗りきしない様子  
←  
「オトナ」になりたいという返事  
←  
次に「魚を釣る仕事」にしたい  
「私」⇨「息子・岳」の返事におかしみ  
素直な子だ、という思い  
←  
「私」の「息子・岳」への思い  
＝  
「いい子」だ

○吟味⇨ものごとを、くわしく調べて選ぶこと。  
○気配⇨目で見たり、耳で聞いたりはっきりと確認できないでぼんやりとしているが、何となく感じられる様子。

**重要語句**

演習問題Bの板書例

アルと二人の幽霊  
↓  
○ダダ(・ジヨナサン)  
○(アントニオ・)エラソーニ

●アル⇨ダダとエラソーニは、もうすぐ見えなくなるの？  
←  
■ダダ・▲エラソーニ  
⇨君次第・君が見えなくなってしまうても構わない  
と思った瞬間、見えなくなる

●アル⇨嫌  
→  
■ダダ⇨人間は現実の世界でしか生きていけない動物  
←  
■ダダ・▲エラソーニ⇨アルの一番最初の記憶を尋ねる  
←  
アル⇨最初の記憶には到達しなかった  
←  
しかし

▲エラソーニ⇨現実には振り回されているから「偉そうに」  
■ダダ⇨人間は現実に生きる動物・アルがどんな現実に生きていくにしたがって、私たちの身体は次第に見えなくなってしまう「悲しそうに」  
←  
●アル⇨嫌・なぜ？  
⇨悲しい・抗議  
■ダダ⇨お前次第  
▲エラソーニ⇨感動したことを絶対忘れないように生きていくなら、もしかしたら、私たちは見えないかもしれない  
え続けるかもしれない  
■ダダ⇨時間や、システムや、社会の愚かな流れに、振り回されるような人生を選んだ瞬間  
↓私たちを見ることが出来なくなる  
←  
しかし  
振り回されて生きることもまた一方では真実  
▲エラソーニ⇨お前は好きな方を選びなさい

●アル⇨温かい笑い声に包まれたまま、眠りについた

○肩を窄める⇨肩身が狭く感じられて小さくなる。

**重要語句**

【指導のねらい】

随筆は、筆者の聞いたこと・見たこと・体験したことをもとに、筆者の意見や感想を自由に書いたもので、とりわけ筆者特有の文体で書いたものが多い。筆者の聞いたこと・見たこと・体験したことといった事実内容から情景が描かれる。情景に対応するように、筆者の感想が述べられるがこれが心情となる。事実と感想を明確に区別することが、情景と心情を読み取る原則である。

演習問題A 1の板書例

「私」↓癩癩もち

●遠縁の家に出かけたとき

↓池袋によってほしい

(高島屋の十円ストア

↓男の子がほしい玩具を売っているから)

↓母⇨承知

●私⇨「何かおかしい⇨曖昧な気持ち」

↓住宅地におりた⇨もうすぐ家に着く

←

母にだまされた

●泣き叫んで抗議

↓大人の思惑通りだまされた自分に腹が立つ

←

●池袋に連れて行ってってくれるまで動かない

↓約束から権利が生まれる感覚

⇨人間の生得のもの

自分は悪くない⇨母を困らせてもいい

重要語句

○権利⇨あることをしてもよい、という資格のこと。

○生得⇨ある性質を生まれながらにして持っている

ということ。

○釈然⇨疑い・恨み・迷いなどが解けて、気持ちが

すっきりすること。

演習問題A 2の板書例

母と筆者の子どものころの思い出

母の願い↓筆者の子どものころ

●素直な子になってほしい

●早口で話さないように

●本を早く読まないように

筆者の疑問⇨子どもは身近な人のまね

↓母は素直ではなかったの？

母は本を読むのが好き

↓自分も影響⇨自分も本を読むのが好き

筆者の思い

筆者が言葉にかかわる仕事⇨母の影響

重要語句

○没頭⇨一つのことがらだけに、熱心にとりくむこ

と。

○諭す⇨言い聞かせて納得させること。

演習問題Bの板書例

筆者の感想

↓北国⇨夏⇨駆け足で去っていく⇨秋⇨さびしい

●筆者⇨夏のおわりから秋へ移る季節⇨知床

●海

「カラフトマスの最盛期

↓自然の偉大さに驚く⇨定置網の漁」

○運搬船が沖合いの漁場へ

○漁師が漁船で運搬船に乗る

○網上げ⇨マス⇨はねまわる・あばれる

「筆者の思い」⇨生命の力がみなぎる

「変わる思い」

⇨人工孵化

⇨人間に食べられるために生きてきたマス

↓食物連鎖⇨マスの死が人間の生

●川

「カラフトマスの産卵が終わるころルシャ川」

↓産卵のために川にのぼる魚⇨魚は自殺しない

↓産卵したのち死ぬ魚・つぎつぎ溯上する魚

⇨生と死の交差

筆者の感想

秋⇨美しい⇨生命の凄絶を感じる季節

重要語句

○人工孵化⇨人が環境などを管理して、卵をかえす

こと。

○食物連鎖⇨自然界における食べるものと食べられ

るものという関係のつながり。

【指導のポイント】

随筆は筆者の個性的な見方や考え方が述べられている場合が多くある。また、筆者独自の感覚的な表現やことばの使い方などが見られる場合もある。筆者の職業や経歴、そして筆者の人生の大きな体験などが、その内容に大きく関わっている。意見や感想と事実を区別して読み取ることが、大切である。

演習問題A 1の板書例

夏の終わりの入道雲 涙のにじみそうな輝きがある

入道雲のいのち かなさの影を曳いている強さと  
でもいいもの

夏も最早さを過ぎた  
↓ かなさの影・衰え・弱まり  
それだけではない気がする

夏の終わりの入道雲 やんちゃ坊主のあがきのよう  
なおかしさ  
= 自分になじれて地団駄ふんでいる  
ようなおもしろさ

入道雲 手足をばたつかせて地団駄ふんでいる子供  
を連想させる雲

入道雲の地団駄 肩肘張って生きる者をたしなめる  
少々疲れ気味の私が、そんなふうに見たがっている  
のかもしれない…怠け心を正当化  
→ またそれだけではない気がする

**重要語句**  
○入道雲 積乱雲の通称。高く盛り上がり雲頂が丸く  
大入道のように見えることから呼ばれる。  
○地団駄 怒りもがいて、くやしがつて激しく  
地面をふむ。

演習問題A 2の板書例

サミヴェル 二人の男 岩登りの絵 風刺画  
人の話 自分手柄のおおげさに自慢

若い男 腕の強そうな男から難癖  
↓ 乗客に迷惑をかけたくない  
↓ 駅の外で決着つけよう  
↓ 腕の強そうな男を背負投げ  
↓ 腕の強そうな男 逃げる 本人の話

友人の話  
その若い男 少年時代  
↓ 貧弱な体 苛められる ↓ 体を鍛える  
なぜ、投げた本人がその話を私にしたのか？  
自慢話だろう  
私も不良を追い払った経験  
↓ この文章で書くことではない  
私 自慢話はしない

**重要語句**  
○腕の節 (この文章で使われている意味) けんかな  
どの強さを表す。  
○自慢話 自分の経験などを、得意になって相手に  
聞かせる話のこと。

演習問題Bの板書例

自転車に乗れない母  
↓ 父が乗り方を教えていることを聞く  
小学生の頃を思い出す

筆者の小学生の頃の思い出  
自転車に乗る ↓ 父と公園で練習  
ハンドルを握りしめる  
↓ 父 自転車を押さえる  
↓ 父 わたしを励ます  
↓ ひとりで乗れた うれしい  
↓ 父の笑顔 父の愛情  
父のあたたかい気持ち ↓ 安心感

父 高齢 ↓ 独立して仕事を始める  
↓ 父の独立した会社にも行かない  
筆者 自分も一人前 気負い ↓ 親  
↓ 面倒な存在  
↓ 家族に背中しか見せない  
父 自分の会社を持たたこと ↓ よろこぶ  
↓ 仕事での悩み ↓ 母 父を見守る  
筆者の気持ち 父を意識 ↓ 父に背中 身守る  
↓ 自転車の練習 ↓ 忘れない  
自分を支えて見守ってくれた  
家族の愛情を感じる

**重要語句**  
○気負い 自分の能力などを信じ張りきる気持ち。  
○面倒 問題の解決やものごとの処理に手間がかか  
りわずらわしい様子。

【指導のポイント】

随筆には2つのタイプがある。一つは文学的随筆であり、もう一つは論説的随筆である。主題は、文学的随筆では筆者の感想であり、論説的随筆では筆者の意見である。主題のとらえ方として大切なことは、いずれのタイプにおいても、事実と感想や意見の違いを読み取ることである。随筆では、筆者の独自の視点や文章の展開などがあり、この区分を明確におさえることが特に重要な作業となる。

演習問題A 1の板書例

冬↓幼児の時

|| 毎朝、バケツ↓張った氷

|| 本当の冬||冬の貌||冬の心

↓大人||見る感受性を失った

夏↓子供の頃||夏の絵

|| 心の中にあざやかな印象を残す

|| 村の昼下がりの午後

↓強烈な真昼の陽

↓家・田圃・木々・風||死んだよう

|| いきいき||子供たち

↓裸足・蝉の声・谷川の流れる音

|| 子供たちを包む

本当の夏

↓大人||残念ながら経験できなくなった

重要語句

○感受性||人がまわりの環境から受ける刺激などを

感じ取ることができる心の働き。

演習問題A 2の板書例

●雑草

・邪魔つけて役に立たぬ↓軽蔑

・うるさくて手ごわくて厄介↓若干恐れ憚る気持ち

人間にとって役に立たぬ草

●樹木↓雑木

← 利用法によって、燃料や細工物の原料になる

種類もまじっている

← 役立たずのろくでなしというようなムードは

薄い↓人様にたいして最低限の勤め

●「私は雑草でございます」↓名乗ったわけではない

むかし

・安い魚だったニシン、カズノコが最高級の魚に見な

されるようになった

・「私は高級魚に変身しました」と宣言しない

イワシやサバが依然として大衆魚としてとどまっ

ている

↓「私は大衆魚のままです」と宣言しない

●魚も草もすべて平等

← 雑草と野菜、大衆魚と高級魚の差別などありはしない

重要語句

○大衆魚||値段が安く、大衆的な魚。イワシ、サン

マ、サバなど。

演習問題Bの板書例

●毎年毎年、新しいことを覚えなければならない

↓(英語の)勉強

← これからの世の中は国際社会

← まず英語ができなければ困る↓大変

●学校の勉強だけじゃない

← ほかにもたくさんさんの勉強をしているんです

← 例友達とつき合うということ|| 大変・大事

← 学校では、自分と違う行動や考え方をしている異

質の人間に出会うことになる

●学校の先生が難しい本を読んでいる

↓びっくりしない||当たり前

← 同級生が難しそうな本を読んでいる

↓びっくりする||刺激を受ける

← 先生方から受ける刺激とは違う、強烈な刺激を友達

から受ける↓大きく成長

・自分と違う人間と仲よくつき合う|| 難しい

・自分と違う人間を理解する

← 恥ずかしい嫌な記憶

← 思い出したくない記憶

← 大人になって || 思いやりの心を持つ

← 相手をりかいしよう

↓大人になる || 今絶対にやっておかなければならないこと

重要語句

○ファクター||要因。

1の板書例

自宅⇨出品作品⇨製作  
自分⇨志村⇨競争意識

← 展覧会の当日

二枚の大作⇨自分と志村の作品⇨見物人が集まる  
志村の作品⇨「コロンブスの肖像画・チョーク」

⇨学校で習わないチョークをつかっている

⇨画題・色彩⇨本物

自分⇨志村の作品⇨ど肝をぬかれる

自分の作品⇨「馬の頭・えんぴつ」⇨こどもの絵

志村崇拜の連中⇨コロンブスの絵に感動の声

⇨歓呼

← 自分⇨学校の門を走り出る

自分⇨くやしい・情けない⇨川原で石をなげる⇨暴れる

⇨自分⇨志村の絵のことをばかりを思う

重要語句

- 大作⇨すぐれた作品。
- 画題⇨絵に描かれた題材の持つテーマのこと。
- 歓呼⇨喜びの感動から大きな声をあげること。

2の板書例

山へ行く・自然にかえる

⇨非自然的な人工物からの逃避

⇨開拓精神⇨若いとき

⇨ひたむきな精根を傾けた⇨充実していた

← 山登りについて

以前⇨欲のない仙人・高尚な趣味

⇨人数が増えた⇨恥ずかしい・面目をなくす

⇨すぐに降参

⇨ヘリコプターの助け

⇨税金のムダ食い

← 以前

⇨進路の開拓

⇨不屈の精神

⇨より良いものを求める

⇨「進化を推進させる力のシンボル」

今

⇨できるだけ歩かない

⇨下調べをしない

⇨写真と同じ場所の確認

⇨インスタント食品のようなもの

← 筆者の気持ち

⇨今の手軽な山登り⇨嘆かわしい

重要語句

- 精根⇨ものごとを成しとげるために、体力を充実させて、精神を集中させること。
- 高尚⇨学問や技術などで高い能力があり、加えて上品なこと
- シンボル⇨象徴。

3の板書例

●アトリエに着いて、

ドアを開け、先に入った⇨母⇨積極的

⇨ぼくの気持ち⇨できることなら逃げだしたい⇨拒否

←

●嗅いだことのない匂いが部屋の中に満ちた

⇨木の汁のような、昆虫の出す液のような匂い

●おじさん「絵、やってみるか」

⇨ぼく⇨沈黙⇨肯定しない

ちよつとアトリエをのぞいてみるだけだから

⇨母に言われてついでにきた

← しかし

話は決まっていた⇨ぼく⇨不満

●高校生ぐらいの人たちがひたすら鉛筆を動かしている

⇨コンクリートブロックやガラス瓶などを描いている

⇨そんなものを描きたいなんて⇨理解できない

●中学生はムライと二人

⇨あまり喋るのが好きじゃない

⇨きらとした眼差し

⇨こんな年上のやつと一緒に絵を描かなきゃならないなんて⇨気もちが暗くなった⇨嫌・憂鬱

●ムライの絵を真似して描こうと思った

⇨下手だっただけがおじさんにわかれば、ぼくに絵を

教えるのは無駄なことだと思っただけ、絵のクラスに通

わなくてもよくなると思った

●ムライの絵を真似した⇨ぼく⇨どきどき

⇨しかし

⇨ぜんぜん似ていなかった

⇨本物の花にも似ていない⇨落胆

重要語句

- アトリエ⇨画家などの仕事部屋・工房。

演習問題Aの板書例

- 1
- (2) 「〜のような」と直接的な比喩を用いている。直喩である。
  - (3) 「体言止め」は最後まで説明をしないで、途中で打ち切ることによって、かえってその後に何かが続くような効果(余情・余韻)をもたらす。  
例えて言うと、テレビドラマで結末を全部説明するのではなく、途中で打ち切るような終わり方をする、見る者がかえってその後を想像したくなるのである。このように後に何かが続いているような思いを残すことが効果的である。
  - (4) 四行目の「〜の葉がひかり」のくり返しも反復である。

- 2
- (2) 倒置法は、本来前後関係が決まっている「主語・述語」や「修飾語・被修飾語」の順序を入れ替えることによって、普通とは違う強い印象を与える効果がある。
  - (4) 「バスの中の僕らには見えて、村の人々には見えないのだ」も同趣旨のようだが、設問が「虹」がどんなものと同じようだと考えているのか」と聞いているから、虹ではないものについて答えなければならぬ。字数も適当ではないが、それ以前に「バスの〜」の部分は、虹についての記述であるから不適当。

- 3
- (1) Aの「山桜花」やBの「雲」に注目する。いずれも名詞である。体言止めの表現技法が使われている。
  - (2) 句切れとは、作者の感動の高まりをあらわすまとまりを表現している。通常の文で「句点」をつける場所である。
  - (3) 字余りとは、短歌では「五七七七七」、俳句では「五七五」が定型であるが、この句の音が五や七を超える句になっているものである。
  - (4) 短歌や俳句では、季節を典型的に表す語を季語として特定されていて、そうした季語を句に原則として読みこむことが一つの規則となっている。

演習問題Bの板書例

- 1
- (1) 詩は、「口語と文語で書かれたものであるか」、「音数などが規則性をもった規定に従って書かれたものか」などの観点から形式が分類される。
  - (2) 三行目に「峠」という語があることに注目する。さらに二行目の「通る」から判断して「峠」が適当である。
  - (3) 対句法とは対応する同種の語句を並べて書くことで、詩にリズムをつけて感動を強調する表現技法である。
  - (4) この「ぬ」は「ない」の意味である。「その」の指す内容は小径を通って行ったり来たりする人々の様子である。
  - (5) 内容の上から判断して峠というものに関心をもつ作者の思い、そして峠と人々の関わり、最後に峠に対する作者の感動という順で描かれている。

- 2
- (2) 「雫」の次の語の「ように」に注目する。比喩表現が使われている。「日の光」に注意する。
  - (3) 「枝々」を人の手や腕のように表現していることから、擬人法が適当である。擬人法はものを人の動作や行為、気持ち、様子で表現する技法である。そうすることで感動を読み手に強く伝える効果がある。
  - (4) 十八行目の「沈黙」という語から判断できる。表面的には何もない「沈黙」がある、という内容から「何もない」が適当である。

- 3
- (1) 「句切れ」の箇所は短歌や俳句で通常の文で「句点」の入るところである。作者の感動を伝える働きがある。①では四句の後に句点を入れて意味が通り、異なる季節の到来を歌ったものを選ぶ。②では二句の四句の後に句点を入れて意味が通り、歌の終わりが名詞で終わっているものを選ぶ。③では「枕詞」に注目する。「枕詞」とは特定のことばの前に置いて、そのことばの持つ意味を強める働きをすることばである。Cの「たまきはる」は「いのち命」にかかる枕詞である。④では倒置法に注目する。倒置法とは、文の中で、通常の文と異なる順序にことばを置くことで作者の感動を伝える表現技法である。
  - (2) 短歌や俳句で、「句切れ」をつくり、作者の感動を読み手に伝える表現に「切れ字」がある。「や」「かな」「けり」などがある。

演習問題Aの板書例

4	<p>(1) 「名月」は秋の季語である。</p> <p>(2) 「名月」の「や」は切れ字である。「切れ字」は作者の感動の高まりを示す表現技法の一つである。</p>
3	<p>(1) 「山道」と「前夜の出来事」という語句から判断してBとなる。</p> <p>(2) 主観的とは自分の主観的な観点でものを判断することであり、客観的とは自分以外のものの観点からものを判断することである。</p> <p>③ 視覚的と聴覚的の違いに着目する。</p> <p>④ 変化に注目した句はCである。「夜毎」「いそぐ」といった表現から判断できる。</p>
2	<p>(1) 二行目の「ように」に注目する。主語が「お星は」なので、小石が星で海が空になる。</p> <p>(2) 「たんぽぽの」の修飾する語句が根である。</p>
1	<p>(1) 二十二行目の「羽音」「柔らかい音」から判断できる。羽音とは鳥や虫の羽ばたく音のことである。</p> <p>(2) 白鳥の色の白と、群がる様子の表現から判断できる。</p> <p>(3) 視覚は目でとらえる感覚であり、聴覚は耳でとらえる感覚である。</p>

演習問題Bの板書例

4	<p>(1) 季語に注目する。「咳」は冬の季語であることに注意する。</p> <p>(2) 切れ字「や」が効果的につかわれて作者の思いを伝えているのは、AとCである。ダイヤモンドの美しさへの感動を、比喻表現で表しているのがAなので、②がAとなる。よって、Cが①となる。虫のイメージから③がDである。④の残った色彩ということ、俳句の作品中の表現を手がかりにするとBになる。</p>
3	<p>(1) 短歌中の表現も手がかりにして、郷里に帰ったときの心のやすらぎや柔らかい布団に象徴される母の愛情への感謝といった、作者の気持ちが推量できる。</p> <p>(2) 言い切りしている表現を探す。布団が暖かく干されたことをうれしいと作者は言っている。句切れの部分をとらえる。</p>
2	<p>(1) 「入学したとき」は過去、その次の内容が四行目に「きょう」として書かれている。それが「現在」である。</p> <p>(2) 十一行目に「ゆたか」とあることから判断できる。</p> <p>(3) 「数れない」という表現から、人々という複数のことながら上げられているAが適当と判断できる。</p>
1	<p>(1) 四行目の「そんな」の指示する部分を考えれば、第一連に「願い」の内容が書いてあるとわかる。</p> <p>(2) 第二連の九行目から、私の視線の先にあるものの状態がわかる。</p> <p>(3) 第一連と第二連の対比から、「いのち」と向き合った作者の気持ちを推量する。「いのち」の始まりと終わりを受け入れる優しい気持ちを読み取る。</p>



【指導のポイント】

歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す規則を学習する。「ゐ」や「ゑ」といった現代仮名にはない文字もある。また、「あはれ」や「かなし」、「はづかし」「をかし」など、古典の文学で使われる語句は、現代語とは異なる意味を持つものもあるので、重要な語句は必ず覚えるようにしたい。

演習問題Aの板書例

1 鶯 〓 「めでたいもの 〓 すばらしいもの」 〓 声・姿形

← 「九重の内 〓 宮中の内」 ↓ 鳴かない 〓 良くない ↓ 人 〓 「宮中では鶯は鳴かない」  
← 本当とは思わなかった ↓ 十年間、宮中に仕えても鶯の鳴き声を聞かない

2 犬が肉をくわえて川をわたる

↓ 川の真ん中 〓 水に映っている肉 ↓ 大きい  
↓ それも取ろう ↓ くわえている肉をおとす  
↓ 欲張り 〓 天罰 〓 自分のもっているものも失う

3 ほんのしばらくだけ、この場所に住もう

← 五年が経つ ↓ 軒下に落ち葉・建物の土台に苔 〓 山にこもっている  
← 都のことを聞く 〓 「やんごとなき 〓 身分の高い人」が亡くなった

4 月や花 ↓ 目だけでみるのではない

↓ 寝床 〓 心の中で 「月・花」のことを思う 〓 「をかし 〓 趣がある」  
● 身分・教養のある人 〓 風流人ぶることもない  
↑ ↓ 片田舎の人 〓 しつこく全てのことに興味を持つ

重要語句

- 1 〓 九重 〓 宮中
- 2 〓 天罰 〓 天の下す罰
- 3 〓 やんごとなき 〓 地位や家が一류であること。
- 4 〓 をかし 〓 (この文章で使われている意味) 心がひかれる。趣がある。風情がある。

演習問題Bの板書例

1 木登り名人 〓 人に指示して高い木の枝を切らせる  
↓ 木を下りるとき 〓 その人に注意

← 名人の行為に疑問  
〓 どうして飛び降りることができるようになってから気をつけるように注意したのか？

木登り名人 〓 簡単なところで失敗する

← 聖人のような 「いましめ」

2 豊前の国 〓 現在の福岡県南東部に住んでいた男 〓 太郎入道  
● 出家する前 〓 いつも猿を射っていた  
↓ 大猿を射る

← 傷を負った大猿 (〓 親猿) が、子猿を助けようとする

↓ 子猿が大猿 (〓 親猿) にしがみつく  
↓ 大猿 (〓 親猿) と子猿はともに木から落ちる

← その様子を見ていた男 〓 猿を射るのをやめた

重要語句

- 1 〓 聖人 〓 知識や徳がほかの人より優れていて、尊敬をうける人。
- 2 〓 入道 〓 仏教を信じて、その教えに従い修行をしている人。

【指導のポイント】

古典の文章では、主語や述語が省略されている場合がある。前後の文の関係から内容をつかむ。また、省略はされていないが、主語の文節を表す「が」が省略されているので、とらえにくくなっている場合もある。その場合には、省略されていると思われる箇所には「は」や「が」を補ってみる。漢文では、返り点の規則を正しく学習することが大切である。

演習問題Aの板書例

演習問題Aの板書例

重要語句

1 ○右大臣⇨太政大臣と左大臣と共に、朝廷の最高の決定権をもつ機関の一つである。

2 ○車⇨平安時代では、貴族の乗る車は牛車のことである。

1 亀山にある御所⇨池

⇨大井川の水を引き入れる目的で水車を造る

⇨何日もかかる

⇨回らない⇨修理をする⇨まわらない

⇨役に立たない水車

2 うれしいこと

●一巻目を読んだ物語⇨その先の物語を読みたい

⇨物語の残りを見つけて読むこと

⇨その内容がつまらない⇨がっかりすることも

●人が破り捨てた手紙

⇨その手紙をつなぎ合わせて読むこと

3 小野宮の右大臣⇨宮中から出て来る

← (現実か夢か)

●車のかげ⇨白っぽい小さな男⇨見たことがない

●小野宮の右大臣⇨「何物だ・けしからん・どきなさい」

●白っぽい小さな男⇨「えんま王の使いの白髪丸」と名のる

⇨車の上に駆けあがる⇨冠の上で消えた

4 (1) 「我を知る」という書き下し文から「知」の下の「レ点」をつける。

(2) 「響きを聞く」という書き下し文から、一字だけ返って読まないのので、「響」の下に「一点」、「聞」の下に「二点」をつける。

(3) ① 「無レ信」から「信無くば」となり「不レ立」から「立たず」となる。

② 「有レ仁義」より「仁義有り」となる。

演習問題Bの板書例

演習問題Bの板書例

重要語句

1 ○比叡山⇨京都府と滋賀県にまたがる山である。ここには、比叡山には天台宗の延暦寺がある。

1 昔のこと

●田舎の子⇨比叡山にこもる

⇨桜が咲く⇨風が強く吹く⇨それを見て泣く

■僧⇨桜が風で散るもの⇨泣くほどのことではない

⇨子をなくさめる

●田舎の子⇨泣いている理由

⇨父の作る麦の花が散る⇨麦の実ができない⇨かなしい

■僧⇨子の話⇨がっかり

2 (2) ① 一字返るには「レ点」が使われる。「刻レ木」は「木を刻んで」となる。二字以上返る場合は「一点」「二点」から「為レ父母」は「父母とす」と読む。

② 返り点のついていない字は上から順番に読むので、「鳥」から読み、「紅葉」樹」を次に読む。「二点」のついた「棲」を讀む。続けて、下に読み進み「青苔、地」を讀んで、最後に「二点」の「照ラス」を讀む。

3 (1) 「聞レ蛩」は「レ点」がついているので「蛩を聞く」と読む。

(2) 「月明無し」から「無」に二字もどることから、「月明」に「一点」、「無」の「二点」をつける。

板書例

- ① ① 口語で書かれていること、規則的な型に基づいた詩ではないことから判断できる。
- ② 「手をひろげ」ているのはポプラの葉なので、人ではないものを人にたとえて表現する擬人法の技法が使われている。
- ③ 十四行目に注目する。わたしたちには、それぞれ個々にだけにつけられる名前がある、という内容から判断できる。
- ④ 二十行目に「考えなければならぬ」という表現があるので、十五～十九行目が倒置法による文であると判断できる。
- ⑤ 「つよくとも」という表現から作者の強い意志をとらえる。
- ⑥ ① 短歌の「五七五七七」のそれぞれの句で音数をこえるものが字余りである。
- ② 「ごとく」とは「よように」の意味であるから、Cが適当と判断できる。
- ③ 「句点」の入るところから判断できる。「ゆかむ」は「行こう」という意味である。
- ④ 「春冷」とは、春になったのに冬の寒さが残っている気象の状態を表現している。
- ⑤ 「ふるさと」「へ」「帰る」ことを思う気持ちを表現していることから、郷愁が適当である。

板書例

- ③ ① 俳句には原則として季語がある。季節をとりわけ明確に示す語に注目する。Cの「雪残る」は春の季語である。Dの「小春」は、春のように暖かい冬の日表現する語で、冬の季語である。
- ② 作者の家を訪ねてきた人が門をたたいている。作者が「おうおう」と返事がしているが、訪ねてきた人に返事が雪で聞こえないので、門をたたき続けている様子をつたっている。
- ③ 「引」は「引き抜く」の意味である。
- ④ 「音・訓」の読みを確かめて音数を数える。
- ⑤ 感動の高まりを表し、句切れをつくる「や」に注目する。
- ④ すこし昔
- 市正時光(=笙を吹く)と茂光(=筆筆師)
- ↓ 囲碁をうつ ↓ 裏頭楽を口ずさむ
- ⇐ 二人ともたのしく感じている
- ⇐ 帝が時光を呼び出す
- ↓ 帝の使者⇐時光に帝の呼び出しを伝える
- ↓ 時光と茂光⇐裏頭楽に夢中
- ↓ 使者の声が聞こえない
- ⇐ 帝の使者⇐時光が裏頭楽を楽しくうたっている
- ↓ 使者の呼び出しの音が聞こえない
- ↓ 帝に報告
- ↓ 帝からどんな罰がくだされるか?
- ⇐ 二人とも⇐風情がある⇐すばらしい
- 自分はそのへ行って聴くことができない
- ↓ 涙ぐむ
- ⇐ 意外なことだ

板書例

- ⑤ 雪の朝⇐風情がある
- ⇐ 人に伝えたいことがある⇐手紙を書く
- ↓ その人への手紙に、用件のみを書いて「雪」のことを書かなかつた
- ⇐ その人からの返事
- その人からの返事
- ⇐ 雪の風情の話も手紙に書かないような心のひねくれた人の話を承知できない
- ↓ その返事⇐興味をおぼえた
- ⇐ 今も亡くなっている人
- ⇐ そのようなことも忘れられない思い出
- ⑥ ① 「紅夢を発く」から「紅夢」に「一点」、「発」に二点をつける。
- ② 「潤戸寂」には返り点がついてないので、そのまま読み下して、「無」には「レ点」がちているので、次の「人」を読んでから返って「無」を読む。

## 演習問題Aの板書例

- 1 文章の構成単位の最小のものは、単語である。
- 2 主語・述語などの文の役割をはたす単位が文節である。
- 3 本設問では、主語が省略されているものはないが、主語が省略される場合もある。「何が」にあたる文節をさがす。
- 4 独立語は、ほかの文節と結びつくことなしに独立して意味をもつ文節である。意味は感動や呼びかけ、応答を表現する。会話文の中で用いられることが多い。
- 5 —線の部分が説明して意味を付け加えている文節をさがす。
- 6 選択肢の工の補助の関係とは、ある文節と、その直後の文節で直前の文節に意味をそえるだけの役わりをもつ文節との関係である。「～いる」「～ある」などの文節がこの関係になる。
- 7 主部とは、文の中で「何が」「だれが」といった主語を含む部分である。主部の最後の文節が主語になる。述部とは、ものや人の動作や、ものごとなどの状態を表し、述語を含む部分である。
- 8 (1) 連文節とは、意味の上でたがいに結びついている連続した文節のことで、ほかの文節との関わりでは一つの文節として働く。
- 9 (3) 「が」は逆接の意味をもつ接続助詞である。主語を含む文節を表す格助詞の「が」と注意して区別する。選択肢の工の接続部とは、文でその後に続く部分に対して、条件や理由などを示す関係にある部分である。

## 演習問題Bの板書例

- 1 (1) 句点から句点までが文である。文が集まって文章を構成している。
- (2) 文節とは、単語がいくつかまとまり、意味のわかる最小の単位のことである。
- 2 (1) ① 「けれど」は逆接の意味をもつ接続助詞で、「がんばったけれど」が一つの文節となり接続語の役割をはたす。
- (2) 文中の他の文節との関わりのない文節が独立語となる。
- 3 並立の関係とは、意味の上からとらえると対等に並んでいる文節のことである。この関係にある文節がたがいにまとまって、ほかの文節と結びつくことになる。
- 4 補助の関係とは、主な意味を示す文節と、その直後に付いて意味を付け加える働きをする文節の関係のことである。
- (2) 「考えて」と「みると」が補助の関係となる。「みる」に接続助詞「と」がついて一つの文節をつくることになる。つまり、「考えてみると」が一つの文節となる。
- 5 (4) 「買ってくる」は「買う」に「くる」という補助の働きをする「くる」が付いて、二つの文節が結びついて一つの働きをする述部となる。この「くる」は本来の「来る」の意味とは離れて補助的に使われる。

# 自立語と付属語

◆指導ページ P.117～122◆

## 演習問題Aの板書例

- 1 (3) エの「広告だ」は名詞「広告」と断定の意味を表す助動詞「だ」の二つの単語からなっている。
- 2 (2) 「ます」は丁寧を表す助動詞である。助動詞は付属語で活用がある。  
(4) 「より」は比較や限定を表す助動詞である。助動詞は付属語で活用がない。
- 3 (3) イの「降り始める」は「降る」に「始める」が合わさり一つの動詞となっている。単語としては一つである。
- 4 (3) 「親切で」は形容動詞「親切だ」の連用形である。「明るい」は形容詞「明るい」の終止形である。
- 5 (2) 「そよそよ」は副詞で風が静かに気持ち良く吹く様子を表す語で、活用がない。  
(4) 「たいした」は連体詞で程度がはなはだしい様子を表し、活用がない。  
(5) 「あらゆる」は連体詞で「全ての」という意味を表す語で、活用がない。
- 6 (1) 一つの単語だけで文節をつくる、という条件から接続詞を選ぶ。  
(2) 一つの単語だけで独立語となるのは、感動詞である。ほかの文節と関わりをもたないで、感動や呼びかけ、応答を示す。
- 7 はじめに大きく自立語と付属語を区分する。次に、活用があるものとないものを区分する。

## 演習問題Bの板書例

- 1 (3) 名詞・動詞は自立語なので、「郵便局」「行く」「用事」「ある」が①である。助動詞は付属語なので、「へ」「が」が②である。  
(5) 名詞・動詞は自立語なので、「土曜日」「朝」「雪」「降っ」が①である。助動詞・助動詞は付属語なので、「の」「に」「が」「た」が②である。「降っ」の「っ」は「降る」に「た」がつながるときに連用形の活用語尾が「っ」になる促音便である。
- 2 (3) 「読ん」は動詞「読む」の撥音便で、活用語尾は「ん」になったものである。
- 3 (4) 「うれし涙」は、うれしいという感動が高まり、その結果ながした涙のことである。「うれし」に「涙」がつながった複合名詞である。
- 4 (2) 感動詞は、ほかの文節と関わりのない独立した文節である。この文では感動詞は「さあ」である。  
(6) 「大きな」は連体詞である。自立語で活用がない。「大きい」は形容詞なので、自立語で活用がある。
- 5 (3) 「たい」は希望の意味を表す助動詞である。「うたかろう」「うたかった」「うたくなる」「うたい」「うたいとき」「うたければ」と活用する。「が」はその文節が主語であることを示す格助詞である。格助詞なので活用はない。
- 6 (4) 「ある」「小さな」「とんだ」は自立語で活用がない連体詞である。「感動的な」は形容動詞である。終止形は「感動的だ」である。「感動的だ」は形容動詞なので、自立語で活用がある。
- 7 (2) 「なった」は動詞「なる」の促音便で活用語尾が「っ」となったものである。これに、過去・完了・状態などを表す助動詞「た」がついたものである。

【指導のポイント】

スピーチ原稿、ポスター・新聞、表・グラフ、地図などさまざまな資料の特徴を理解し、情報を読み取れるようにする。さらに、資料を活用し、資料をもとにした文章や対話文などを読み取れるようにする。

演習問題A 1の板書例

- 尊敬している人物
  - ⇨ 部活動の先輩たち
- 「みなさんの部活動の先輩たちは、どんな人たちですか」
  - ・ いろいろなことを教えてくれる
  - ・ 楽しくおしゃべりしてくれる
- バドミントンの先輩たち
  - ☆とても礼儀正しい
    - ⇨ 部活動が始まる時、終わるとき、いつも大きな声であいさつしている
    - ・ 体育館に入るとき⇨一礼をして入る
    - ・ 目上の人には正しい敬語で話しかける
    - ・ 相手の話を熱心に聞く
    - ・ 後輩にも、自分たちからあいさつをして、偉そうにせず、丁寧に接する
  - ☆道具を大切に使う
    - ⇨ 部活動が終わると、ラケットやシューズの手入れをする
    - ・ シャトルの数も確認して、なくさないようにしている
    - ・ ラケットを放り投げるようにして置く人
    - ⇨ 厳しく注意

⇨ 道具を大切に使う心がけ⇨バドミントンの向上心

演習問題A 2の板書例

- 佐藤さんの意見
  - ・ イラストがわかりにくい
  - ⇨ 運動場や体育館ではなく、大会で行うスポーツのイラストにしたい
- 四つすべてより、一人が走る様子の方が印象に残るから
- 山崎さんの意見
  - ・ キャッチコピーが具体的な方がよい
  - ⇨ 一年生は初めて参加するので、スポーツ大会の特徴がわかるようにしたい
  - ・ 好きなスポーツに参加できることがわかる
  - ・ 自由な雰囲気でクラスや学年に関係なく交流できることがわかる

演習問題B 1の板書例

- ボランティア⇨自ら進んでする人
  - ⇨ サイクル、環境美化、社会福祉、町づくりなどの奉仕活動
- 私(島田さん)の活動
  - ⇨ 公園の清掃活動など美化活動を中心に参加
  - ・ 活動に参加する人を増やしたい
  - ・ 自分自身ももっと活動に参加したい
- 「ボランティア活動」の形態別行動者率
  - ⇨ 団体に加入して行っている
  - ⇨ 団体に加入しないで行っている
- ⇨ 団体に加入して行っている
  - ・ 割合が高いものから
  - ・ 地域社会とのつながりの強い町内会などの組織
  - ・ その他の団体
  - ・ ボランティアを目的とするクラブ・サークル・市民団体など
  - ・ NPO

演習問題Aの板書例

- 1 (1) 主語と述語の関係の中で、この文では、「何が」「何だ」の主語・述語の関係になるようにすることがもとめられている。だから、主語の「短所は」に対応するには「〜ことだ」というつながりをもとめられる。  
(2) 主語と述語の関係の中で、この文では、「何が」「何だ」の主語・述語の関係になるようにすることがもとめられている。だから、「作業は」は「取りました」に対応しない。
- 2 (1) 主語と述語の関係の中で、この文では、「何が」「どうした」の主語・述語の関係になるようにすることがもとめられている。だから、「たずねた」ことがらを主語の後に置く。  
(2) 主語と述語の関係の中で、この文では、「何が」「何だ」の主語・述語の関係になるようにすることがもとめられている。だから、「どんな」「教科は」は「理科だ」というつながりで文を作ることがもとめられる。
- 3 (2) 「目標の一つに」の中に「たくさんの本を読む」ことがある、という意味を表す文を作る。  
(4) 「もし」は「〜たら」という特定の語に対応することをもとめる副詞である。こうした副詞は、陳述・呼応の副詞とよばれるものである。  
(6) 「良いところは」が主語である。この場合の「ところ」は「ものが行なわれる場所やそれから発展して抽象的な立場や地位」などを示す。よって、主語に対応して、文末は「〜ところだ」や「〜という点だ」になる。
- 4 (2) あることがらを別のものだとえる比喩の表現を含んだ文を作る。  
(5) 「ても」に注目する。「ても・でも」に続く後半の部分は、前半の部分と逆接の関係になることを理解して作文する。
- 6 推敲とは、文章の内容や表現、漢字の使用、文体、文の体裁などについて誤りがないか確認し、誤りがあれば直す作業である。その時に、作業の標準化により能率を高める目的で、推敲のための記号が決められている。

演習問題Bの板書例

- 1 (1) C 「決して」は「〜ない」という語の対応をもとめる。「決して〜ある」という表現はない。  
D 設問文では、「ぼく」がほかの人から問題がある人間だと思われる、という意味になる。「ぼく」が自ら問題視しているといった内容にするには、受け身の表現を改める必要がある。  
(2) 「〜たり、〜たり」という表現を使って、並立の関係を表すことがもとめられる。  
(3) 主述のねじれ。「何が」「何だ」の関係で、「長所」が主語なので「できることだ」とする。
- 2 (1) 並立の関係を表す「〜たり、〜たり」という表現を使用する必要がある。  
(5) 打ち消しの推量を表す「〜まい」が適当である。
- 3 (2) 受け身の表現は「れる・られる」という助動詞を使った表現になることに注目する。受け身の意味を表す助動詞「れる・られる」には命令形の「れる・れよ」「られる・られよ」があるので、作文をするにあたって使用できる。  
(3) 「決して〜ない」という陳述・呼応の副詞を使う条件に注意する。意味は「まったくない」である。
- 4 部首や音・訓の読み方が同じ漢字は、たがいに誤りやすいので注意を要する。
- 5 原稿用紙の使い方では、会話の(カギ)「」の扱い方に注意を要する。会話の始まる最初は行を変えることに注意する。また、会話文の最後につける句点は、会話の終わりの(カギ)「」と同じマスに書く。

板書例

- ① 「～ので」は文の接続語になる接続詞である。意味は理由や原因を表す。
- ④ 「激しく」は形容詞「激しい」の連用形でもこの状態を説明する語である。
- ② (1) 「ある」は動詞である。自立語なのでそれだけで一つの文節をつくらることができる。  
(2) 「する」はここでは補助動詞ではなくて、「～の状態になる」という動詞である。  
(3) 「大きな」は連体詞なので、単独で一文節になる。
- ③ (1) 「見て」の「て」は接続語である。品詞としては接続助詞で連用修飾語となる。  
(2) 「つらい」の直後の「そして」に注目する。「そして」は並立の意味をもつ接続詞である。「つらい」と「厳しい」が並んでいて「状況の」の文節を説明している。
- (3) 「背に」の「に」に注目する。格助詞で連用修飾語をつくる。この場合、動詞「急ぐ」を説明している。
- ④ (1) A「も」に注目する。「も」は並立の意味を表す副助詞である。  
B「と」に注目する。並立の意味を表す格助詞である。  
(2) 補助動詞と補助形容詞に注目する。

板書例

- ⑤ (1) Aの「表現する」は「表現」と「する」ではなく「表現する」で一つの単語である。  
(2) 付属語の助動詞と助詞に注目する。  
(3) 名詞に注目する。  
(4) Bの「この」は連体詞である。Cの「おや」は感動詞である。
- ⑥ (1) 固有名詞とはただ一つしかないものである。  
(2) ③の「それ」は名詞である。「それ」は名詞の中の代名詞である。  
(3) 「ぜひ～してください」「もし～なら」「とても～できない」といった一定の表現との組み合わせが求められる。  
(4) 感動や応答などを表す単語は感動詞である。主語や述語、修飾語にはならない。その語だけで一つの文節となる。活用はない。
- ⑦ 主部とは主語を含む文のひとまとまりの部分である。述部とは述語を含む文のひとまとまりの部分である。主語と主語を説明する修飾語がある場合にはそれらを合わせた部分が主部である。述語と述語を説明する修飾語がある場合にはそれらを合わせた部分が述部である。

板書例

- ⑧ (2) 原因を表す述語は物事を表すことである。「寝なかった」ではなく、「寝なかったことだ」であれば主語に対応できる。  
(3) 「何が～何だ」の関係で対応する。「もの」には名詞が対応する。
- ⑨ (1) 「何が～どうした」の関係の文をつける。  
(2) 「何が～何だ」の関係の文をつくる。
- ⑩ 陳述・呼応の副詞にかかる問題である。  
(1) 「あるまい」は打ち消しの推量である。打ち消しの推量をもとめる副詞の「よもや」を選ぶ。  
(5) 「たら」に注目する。「たら」は仮定の条件を表すので、これに対応する「もし」を選択する。
- ⑪ (5) 「おそらく」は「だろう」をもとめる副詞である。
- ⑫ (1) 「以外」はそのことごとを除いたものという意味である。「意外」は予想していたことに反してものごとがおこることを表す場合に使用する。  
(4) 「何が～どうする」の文ではなく、「何が～何だ」の文である。「目標」に対応するためには、「～こと」を使う。  
(6) 「何が～どうする」の文なので主語「私は」に対応するには「どうする」を表す語にする。
- ⑬ 原稿用紙の使い方ととりわけて注意することは、改行のあとには一字さげること、会話を表すかきかっこのあとは改行することである。



【指導のポイント】

説明文は、筆者の主張を正確に読み取ることがもっとも重要なことである。文章の構成として、「導入→説明→筆者の主張」のタイプ・「導入・筆者の主張→説明」のタイプ・「導入・筆者の主張→説明→筆者の主張」のタイプの3タイプがある。いずれのタイプも導入＝問題の提起に対する回答という形で筆者の主張が述べられていることが多い。

1の板書例

自然環境 ↓ 環境に適応した生物 || 存在

← 自然に人間が手を加える行為 || 歓迎

● 雑木林の場合

|| 二次林 ↓ 林床に光 ↓ 昆虫や鳥獣 || 集まる

● 草地の場合 || 適応した生物 || 多い

● 原生環境を破壊した自然

↓ 山間の田畑 || 湿地の創造 || 溜め池や水路

↓ 新しい環境 || ささまざまな生物

● 人と動物の二重構造

↓ 人の利用のための環境

|| 生物の棲息にもプラスの環境

← 適度の人の関与 || 必要

里山の自然

|| 「人の営み ↓ 自然との調和」 || 二次的自然の場所

重要語句

○ 原生 || 人の手が加えられていない状態のもの。

○ 里山 || 人が生活を営む集落に接していて、人の影響をうけた山のこと。

2の板書例

文化 || 絶えざる「変化+創造」

↓ 文化の価値・力 || 存続

← 日本語について考えて見る

日本語 || 長い歴史の変化

↓ 以前の日本語と現在の日本語

|| 異なっている

← 日本語の中 || 日本語の文化を保持

↓ 美しい日本語 || 定着

↓ 個性・音・文字・文章的表现 || 魅力

↓ 外国人 || 日本文学の興味

↓ 日本人の魅力・日本の社会や歴史

|| 世界に伝わる

重要語句

○ 絶えざる || 絶えることのない。続いている様子をあらわす表現。

3の板書例

日本語 || 「終わりよければすべてよし」構造

↓ 「初めよければあとよし」構造 || 新聞

← 新聞 ↓ ニュースの量の多少

新聞 || ニュースの量の多少

|| 扱いが大きく異なる ↓ 後で新しいニュース

↓ 「不可欠要素を削る」不便

↓ 書きなおししないで通用させる

|| 前方重心型

日本語 || 下方重心型 || 富士山型

↑ 新聞 || 逆三角形 || 逆さ富士の形

← 新聞 || おびただしい部数

|| 読者が深い影響受けない

|| おもしろいという感じがない

原因 || 「三角形の向きが逆

筆者の考え

新聞をおもしろくする || 富士山型にする

重要語句

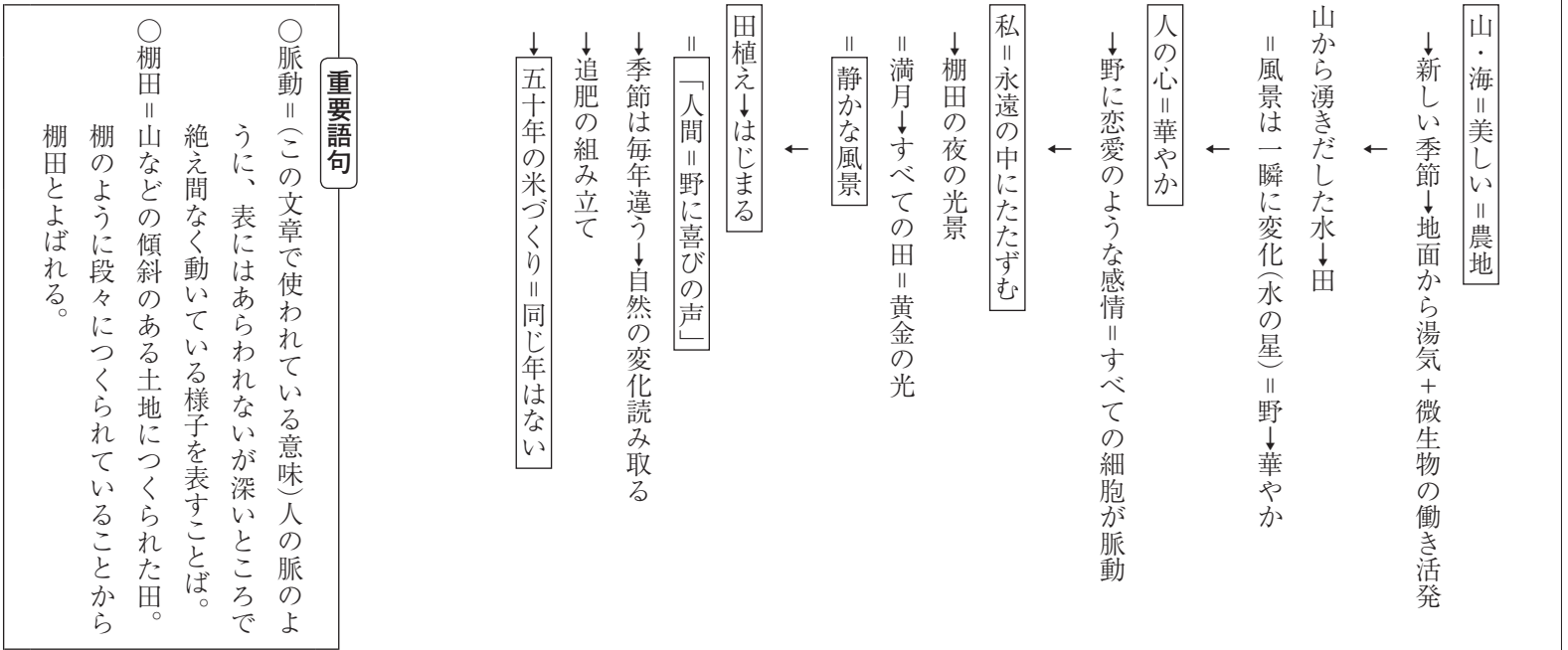
○ 不可欠 || なくてはならないこと。

○ 逆三角形 || 頂点が下、底辺が上に位置する三角形。

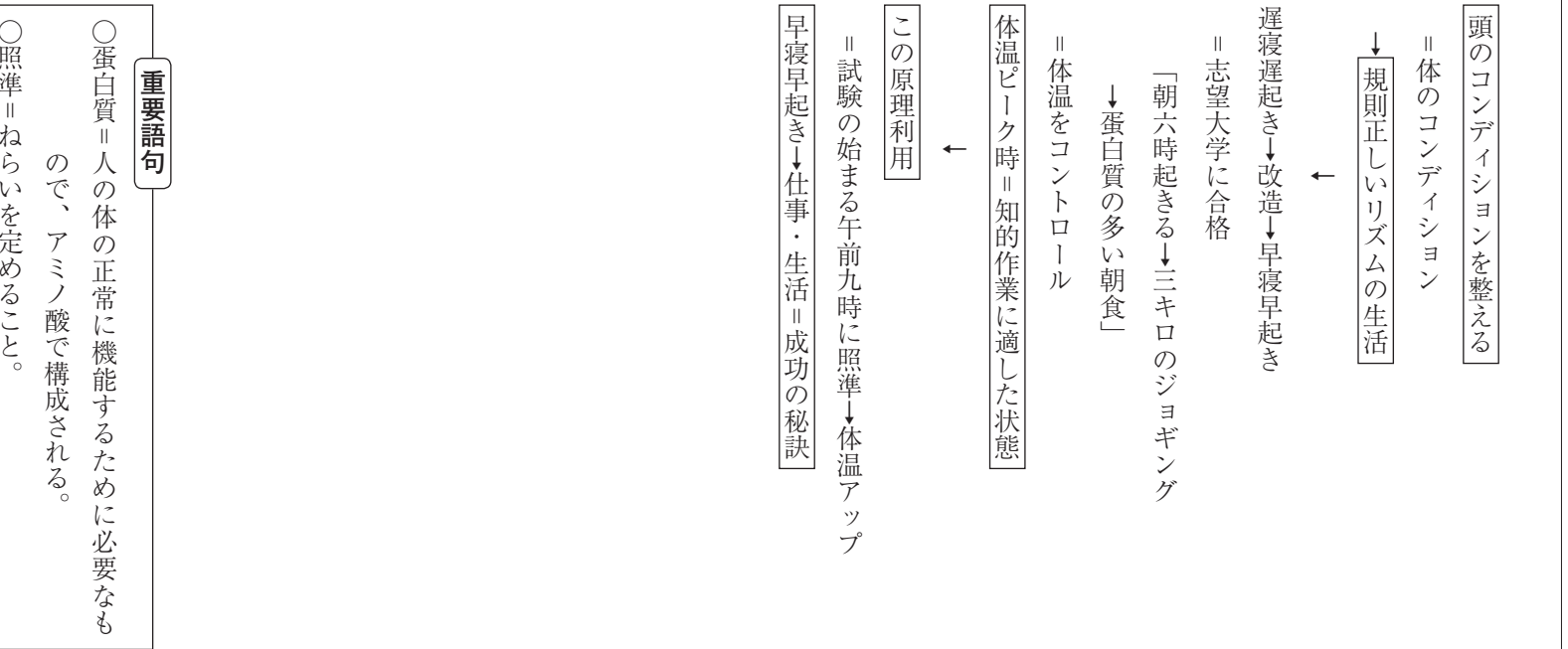
【指導のポイント】

論説文では筆者の主張を読み取ることが求められる。文章の内容を読み取るには、形式段落ごとの要点を読み取る。その上で、形式段落ごとの意味の上でのつながりを把握する。こうした意味のつながりでまとめられた段落が意味段落である。意味段落のたがいのつながりから文章の構成をとらえる。この構成の中で、筆者の主張を読み取る。

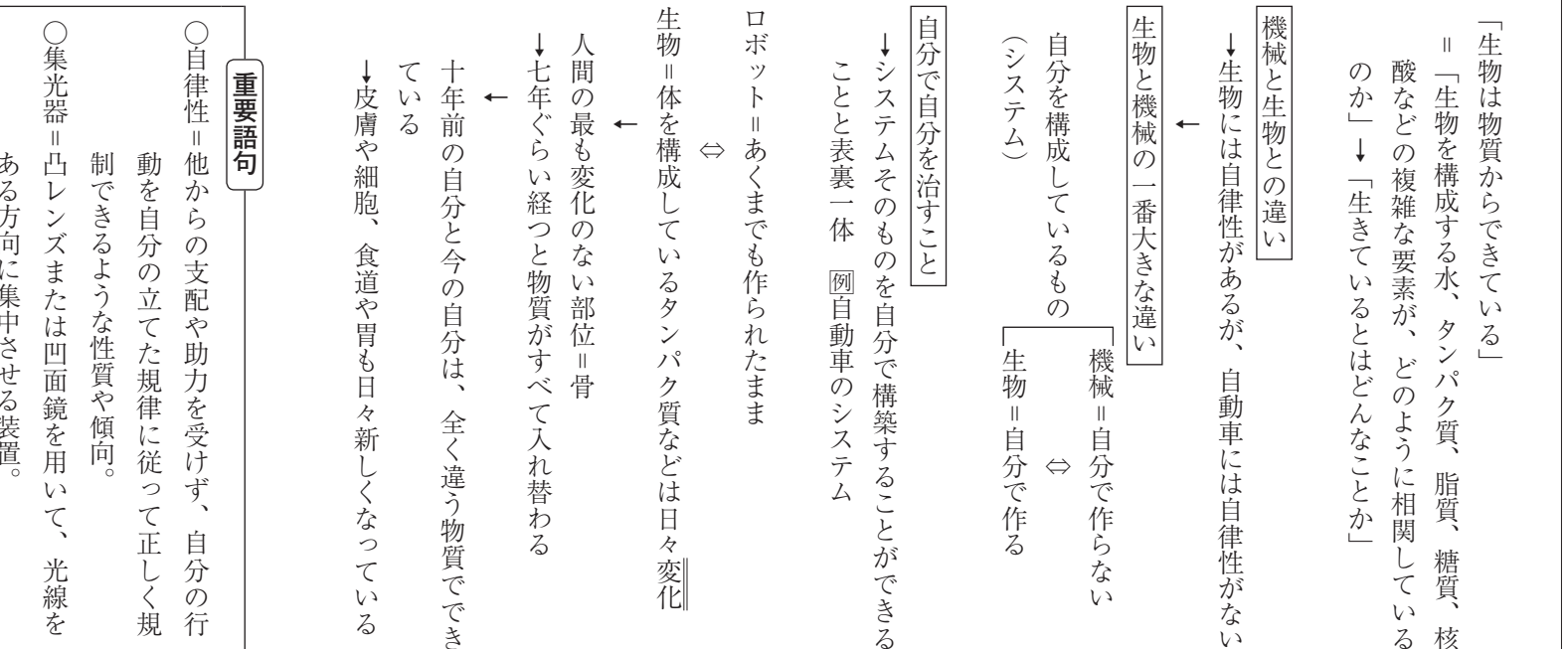
1の板書例



2の板書例



3の板書例



# 小説文の演習

◆指導ページ P.150～153◆

### 【指導のポイント】

小説文では作者の伝えたいことは、登場人物の心情の変化の中に表現されていることが多い。事件やできごとの前後に注目して、主な登場人物の気持ちの変化を読み取る。主な登場人物の心情は、気持ちを表現することばや行動・行為、会話の内容から判断することができる。さらに、情景描写からこころの状態を読み取ることもできる。

### 1の板書例

重要語句

○鮮明 〓ものの形や色、ことからの有り様があざやかで、はっきりしていること。

○縁側 〓日本建築の家屋の部屋の外側のへりに板で張り出して作られた通路のこと。

●「ぼく」の回想

「ぼく」 〓母と離れて「おじいさん」の家に住む

↓

「ぼく」の誕生日 〓母が会いにくる

●木戸 ↓母が入ってくる

「その人 ↓黒い日傘」 〓母

↓

映画のワンシーンのように鮮明

「ぼく」の気持ち 〓静かな気持ち

←

母と離れたことがはじめてのこと ↓久しぶりの母

「ぼく」の気持ち 〓静かな気持ち

←

●広縁 ↓母が座る

「ぼく」の気持ち

〓母 〓なんだかちがう人みたい

↓

ぼくの知らない白いワンピース・白いサングラス

←

「ぼく」の気持ち 〓ひんやり

←

〓もつとよるこんでいいはずなのに…

〓よろこんだ気持ちになつていない

〓期待外れ 〓残念

←

●母と「ぼく」 ↓おたがいに目を合やす

←

●縁側に座る母

「ぼく」の気持ち

〓ぜんぜん知らない人に見える

### 2の板書例

重要語句

○腹が立つ 〓怒りの感情が発生すること。

ミキちゃん 〓「ひとりであるのが好き？」

↓

宇佐子に聞いてくる

宇佐子 〓「ひとりである」

↔

ちがう

「ひとりぼっちである 〓仲間外れにされる」

↓

答える

↓

ミキちゃんの気持ちがわからない

宇佐子 〓「ひとりであるのが好き？」

↓

ミキちゃんに聞く

ミキちゃん 〓宇佐子が受け入れてくれるか心配

↓

きっぱり「好き」と答える

↓

宇佐子が受け入れてくれた

〓ほっとする

宇佐子 ↓ミキちゃんの様子から判断

↓

ミキちゃん 〓「ひとりぼっちである 〓仲間外れにされる」ことは嫌いと判断

〓ミキちゃんの気持ちがわかる

ミキちゃん ↓「ひとりであるのが好きなんておかしい」と言われた

↓

宇佐子に伝える

宇佐子 〓ミキちゃんのために腹が立つ

### 3の板書例

重要語句

○スマートフォン 〓電話機能・メール機能に加えて様々な機能を利用できる携帯電話端末。

●場面 〓甲野さんとわたしが一日だけ親友のふりをするための話し合い

●二人ともがきらいなものの話題

・パレットをゆつくり洗うおじいさんのこと

・水滴を飛ばしまくるおばさん二人組のこと

・先生の奥さんがラクダに似ていること

←

二人とも、びっくりするぐらい、気持ちがわかった

↓

わたしの気持ち

〓本当に友だちになれそうないきおい

●甲野さん 〓本当に友だちになれそう、って思わなかった？

↓

その場の盛り上がりで、共通のどれかの悪口とかで「友だち！」ってなるのが苦手

←

わたしの気持ち

〓こんなふうだから友だちができないんだな

←

「ここから友だち」とはつきり友だちの枠を決めているから

●ちよつと気が合つたら「友だち！」

↓

ひよつとしたらこの先、何もかも話せる親友になれるかもしれない 〓うれしい

↓

甲野さん 〓友だちって、そんな柔軟で適当な感じだよ

よかったんだ

↓

わたしの気持ち 〓甲野さんておもしろい

←

バイトで友だちのふりをするより友だちのほうがいい

# 随筆文の演習

◆指導ページ P.154 ~ 159◆

### 【指導のポイント】

随筆文には、筆者の個性的な表現が使われたものや、文章構成が独特なものがみられる。小説のようなスタイルをとるものや論説文のスタイルをとるものがある。筆者の意見や考えと、事実を明確に分けて読み取ることが重要になる。

### 1の板書例

骨董 ↓ 安いものでも楽しめる  
 ↓ 日本美術のいいところ  
 ↓ 美しいものを選ぶのはむづかしい  
 ↓ 発見すること自体に意味  
 秦秀雄 ↓ 井伏鱒二の『珍品堂主人』のモデル  
 ↓ 安く・面白いものをもっている  
 ↓ 豚の蚊やり ↓ 色・形など美しい  
 ↓ 譲ってくれなかった  
 ↓ かわりに明治初期の手作りの鉄の西洋剣を二丁くれた  
 ↓ 一生懸命作ったうつくしさ

筆者の気持ち ↓ 感心  
 ↓ 珍品堂の名に背かない眼の持ち主

骨董 ↓ 一級品とちがいがい買値はたかが知れている  
 ↓ 骨董に必要なもの  
 ↓ 「運」と「良いものを見きわめる眼」  
 ↓ 本当に良いもの  
 ↓ 手に入れたもの ↓ 手放したくない  
 ↓ 商売は二の次

筆者の意見 ↓ 他の職業にもあてはまる  
 ↓ 人間の考え方  
 ↓ 「金もうけ」か「人生の楽しみか」

### 2の板書例

父 ↓ ヨー君はヘッセを読んで  
 ↓ 数日後 ↓ ヘッセ『車軸の下』を買ってくる  
 ↓ 僕 ↓ 大人に誉められた ↓ ヘッセを読む  
 ↓ 父 ↓ 僕に本を買い与える ↓ 負けず嫌い

僕 ↓ ヘッセとの出会い  
 ↓ 「父 ↓ 対抗心」  
 ↓ 「僕 ↓ ライバル心・大人に誉められた ↓」  
 ↓ 不純なもの  
 ↓ 本を読破できたこと ↓ 感動  
 ↓ 五年生の冬 ↓ 最初の詩を創作

僕 ↓ 「ヨー君 ↓ 打ち解ける ↓ 友情」  
 ↓ ヨー君の書いた詩が好き  
 ↓ ヨー君の詩に感動 + 力量に感服

**重要語句**  
 ○ 負けず嫌い ↓ 他の者の負けることを嫌う気持ち  
 ○ 不純 ↓ いろいろなものが混ざっている様子を表すことば。

### 3の板書例

私 ↓ 料理番組に出演 ↓ アップルパイを焼く ↓ 番組の裏側  
 ↓ 興味深い ↓ スタッフの方々の労力に感心

当日  
 ↓ 調理師専門学校の日先生 ↓ 少年のように若くすがすがしい男性 ↓ 下準備や調理の補助

撮影中  
 ↓ 先生 ↓ 作業の段取り・撮影が滞らないようにもの用意・作業台をきれいにする  
 ↓ 「動き ↓ 控えめ」 「神経 ↓ 研ぎ澄ます」  
 ↓ 自分の存在を消し去る  
 ↓ カメラに写らないようにする  
 ↓ 私 ↓ 先生の助けにより全く緊張しなかった  
 ↓ 手作り：先生の指導でどうにか格好がよかった

撮影終了  
 ↓ 私 ↓ ほっとする  
 ↓ 先生 ↓ 一人で後片付け ↓ 控えめ  
 ↓ ↓ 自分の役割をひたむきに果たす様子 ↓ 感動  
 ↓ 先生 ↓ 中学を卒業して調理師専門学校  
 ↓ ↓ 今ではデザート部門の教師  
 ↓ 怒られてもへこたれない  
 ↓ ↓ 仕事をこなすことが求められてきた  
 ↓ 私 ↓ 先生の総明な仕事ぶり  
 ↓ ↓ 今までの努力を想像  
 ↓ ↓ 黙々と労働する人間 ↓ ひとおしさを感ずる  
 ↓ 先生 ↓ 最後まで謙虚である・微笑を崩さない

**重要語句**  
 ○ 研ぎ澄ます ↓ 周囲に対して、鋭く注意を働かせる様子。  
 ○ ひとおしさ ↓ 大事にして、かわいがりたいと思う気持ち。

板書例

**1** (1) 草のことが書かれている部分と、父娘のことが書かれている部分に分けられる。

(2) 詩にはさまざまな表現技法が使われる。人でないものを人にたとえて表現する技法は擬人法である。

(3) 八行目に注目する。「で」は理由を表す格助詞である。「めをさます」は「開く」を意味する。

(4) 設問文から「適切でないもの」を選択することに注意する。「閉じる」を表す語を含むイが正答である。

(5) 「真昼」と対照的な表現が使われている四行目と十二行目に注意する。「顔」から対比する「風情」という語から四行目に注目する。

**2** (1) 「ヒロシマ」から推量する。

(3) 二行目と四行目、八行目の文末表現に注目する。

**3** (1) この詩で使われている言葉は、一般的な生活で使われているものである。平易な言葉だからこそイメージの広がりによって深い意味をこめている。

板書例

**4** (1) 「足乳根の」は枕詞である。枕詞とは句の中で特定の語の語調を整えたり、語の意味することから気持ちよさをこめるために使われる。

(2) 句切れとは、通常の文では句点の入るところで、句が切れることである。感動の焦点がある。切れ字の「ぞ」に注目する。

(4) ① 青春期の女性が対象であることから、二十や黒髪が読まれているCと判断。「おごり」は、自信を意味している。

② 悲哀は悲しい感情を意味する。さらに二句目が字余りからAと判断できる。

**5** (1) 「いくたび」が説明する語を見つける。

(2) 「し」は過去の意味を表す古語の「き」の連体形である。

(3) 「空」からイメージされることを推量する。時間をもてあましていただけではないことを読み取る。

板書例

**6** (1) Aの季語は「ひばり」で春の季語である。Bの季語は「夕立」で夏の季語である。

(2) ① 字余りは五七五の音数になっていないものを選ぶ。

② 「かな」「や」「けり」は切れ字である。

(3) 「やすらふ」は「休む」の意味から、休むのは作者である。

(4) Bの句は、激しい夕立に飛び立つこともできないで、草をつかんでいるように寄り添う雀の様子を歌ったものである。

(5) 「ともる」とは「火がともる」の意味である。「胸ともる」とは「希望の火のように熱い思いが湧いてくる」の意味である。

**7** (1) 「雲海」や「こがね虫」は夏の季語である。

(2) 設問文にあるような基本の音数にこだわらないとは、五七五の調子を破る字余りや字足らずの句を見つける。

(4) 「ちぢ」は「千ぢ、千千」とも書く。数の多いことや数多くのものに細かく分かれることを表す。

(5) 感動の中心を表す表現技法のひとつは切れ字である。Eでは「かな」が切れ字である。

# 詩歌と鑑賞文の演習

◆指導ページ P.164～167◆

### 【指導のポイント】

詩歌の鑑賞文では、筆者の視点から詩歌に対して感想や意見が述べられている。筆者の感想や意見を、文末表現からとらえることに加えて、詩歌の解釈やとらえかたなどからも理解することが求められる。そのために、詩歌の主題を説明しているのか、筆者の感想や意見あるいは筆者の独自の視点から批評しているのかを読み取ることが重要である。

### 板書例

#### 1 詩風

##### ● 主題

街↓貧しい住人・その人たちの生活

##### ● 表現

愛情をもって表現↓分かりやすい表現

純粋な感情表現↓叙情詩の美しさ

##### 筆者の感想

ほのぼの⇨人間的なやさしさ

悲しみ⇨父親

⇨貧しい↓おもちゃを子供に買ってやれない

わかりやすい表現

#### 2

##### ● 詩の印象

あかちゃんのぬくもり⇨情愛のかたち

##### ● 詩の構成

書き出し⇨読者に語りかける手法⇨うまい

題名⇨深い意味に感動⇨子供を思う気持ち

##### ● 詩の内容

■ 母親の前⇨娘⇨現在・過去・未来が立っている

↓娘は母から出発

■ 母親の抱く赤ちゃん⇨娘とは別

⇨母親(作者)自分自身の心

##### ● 筆者の感想

母親⇨自分の娘への思い

↓抱き続け↓別れ続け↓生きていく

##### 重要語句

1 ○ 叙情詩⇨作者の感情を表現した詩。

2 ○ ぬくもり⇨あたたかみ。

### 板書例

#### 3

蛙⇨冬眠から覚める↓「春の光」⇨全身で感じる

⇨よるこび

雪国の春の描写⇨雪↓反射

↓「春の光」⇨満喫

↓いのちあるものよるこび⇨生命感

#### 4

晩秋の夕方↓射光に輝いて散る銀杏葉

⇨荘厳な美しさ

↓晶子の優れた美意識

⇨銀杏の躍動⇨生き生きと表現

⇨耽美的な精神

↓自然の実相に肉迫

##### 重要語句

3 ○ 満喫⇨欲望が十分に満たされて、心ゆくまで満足すること。

4 ○ 美意識⇨美しさに対して持つ感覚。

○ 耽美的⇨美をもっとも大切なものとする感覚をもつ、という意味。

### 板書例

#### 5

雪だるま⇨童心がよみがえるもの

● 雪がやむ↓上天気

■ 子供たち⇨雪だるまを作る↓雪合戦↓さんざん遊ぶ

←

● 日暮れ

■ 子供たち⇨家に帰る

←

雪だるま⇨残る

● 夜空に星の輝き

⇨星たち⇨子供たちのおしゃべり

⇨雪だるま⇨黙っている

⇨子供たち⇨眠った

#### 6

##### 詩の内容

鳶⇨歳時記にない

鳶の背景になる春の大空↓春の柔らかさ

二羽か数羽の鳶が近寄ったり離れながら空の高みへ高みへと昇っていく様子

詩の表現

動詞の多用↓的確な描写↓鳶の力強さを表現

##### 重要語句

5 ○ 童心⇨子供の持つ純真な心。

○ 上天気⇨よく晴れている天気のこと。

6 ○ 歳時記⇨俳句の季語を分類して説明した書物。

【指導のポイント】

古文・漢文に関する問題で、現代語訳が設問文にある場合には、現代語訳の読み取る力が重要である。現代語訳について、一つ一つの古文や漢文の語がいずれの現代語になっているかを比較して理解することのみならず、文章の要旨を読み取ることが求められる。

板書例

1 現代語訳

月・花↓目でだけ見るもの+心の中で思う  
家の寝床の中↓月を心の中で思う

← 月・花のことを思う⇨目で見るより趣がある

2 現代語訳

今となつては昔のことだが

●時 夕暮のころ

●登場人物 甲斐の国の国守の役人⇨侍

●行為 引目の矢で狐をいる⇨狐の腰に当たる

3

●登場人物 藤原公世の兄⇨良寛僧正

●登場人物の性格 怒りっぽい

●話の展開

■宿坊のそば⇨大きな榎の木

人⇨榎の木の僧正と呼ぶ

けしからぬ⇨榎の木を切る

■根が残る

人⇨切り株の僧正と呼ぶ

ますます怒る⇨切り株を掘って捨てる

■切り株を掘り出した跡⇨大きな堀

人⇨堀池の僧正と呼ぶ

重要語句

2○国守⇨律令制度の下での国の長官のこと。

3○僧正⇨律令制度の下での僧の位にあつては、最高の位のこと。

板書例

4 場所 比叡山延暦寺

●話の展開

北谷の児↓雪にまさる色の白さ⇨愛された

南谷の児↓花にまさる美しさ⇨趣がある

← 興味のない人⇨興味をもつようになった⇨けんか

花↓悪く言う

雪↓変わりもの ⇨互いを非難

←

雪を例にあげた人⇨花をほめた人をやつつける

花を例にあげた人⇨雪をほめた人を叩きのめせ

山中⇨はげしく対立

5

●登場人物 伯楽⇨馬のよしあしをうまく見分ける人

↓一日に千里も走る名馬が見出される

●一日に千里を走る名馬はいつでもいる

↓これを見分けることができる伯楽はいつでもいるとは限らない

⇨名馬がいたとしても粗末なあつかいを受け、つまらない馬たちといつしよに死んで

しまう

←

千里を走る名馬としてたたえられることはない

重要語句

4○趣⇨(この文章で使われている意味)ものごとから感じとることのできる風情。

【指導のポイント】

解説文が本文を読み取るヒントになることを理解させる。古典の解説文では、古典の現代語訳とは別に、題材の古典の要旨あるいは解説文の筆者の感想や考えなどが述べられている。題材となる文章の要旨なのか、筆者の意見や考えなのかを区別して読み取る必要がある。

板書例

1 現代語訳

大柄でない男の子↓殿上童⇨りっぱな装束⇨可愛い姿のよい幼子↓遊ぶ⇨抱きついて寝てしまう  
⇨可愛らしい

解説文

- 清少納言の殿上童⇨「元服前・しかるべき家柄・容姿端麗」の少年を見る視点⇨可愛らしい
- 筆者の感想⇨宮中の少年の緊張した面ざし
- 清少納言の幼子を見る視点
- ⇨母親・子育ての経験のある人の視点
- 筆者の感想⇨優しい母親⇨清少納言の面影
- ⇨涙ぐましい思い

2 現代語訳

- 九月ごろ
- 一夜の雨⇨けさあがる
- 朝日が前庭にさしこむ⇨くもの巢
- ⇨破れたところ⇨雨⇨玉がつらねたようにみえる
- ⇨しみじみとした趣があり、興味深い
- 日が高くなる⇨萩⇨露が落ちる様子
- ⇨おもしろい
- ⇨おもしろいと思わない人がいる⇨おもしろい

解説文

- 枕草子⇨宮廷の人間模様・人間関係の話
- ⇨ところどころに配す⇨自然描写の話
- ⇨人の心が重ねられている
- ⇨清少納言の世の中に対する見方
- ⇨読み手の心に広がる

重要語句

- 1 ○面ざし⇨顔つき。
- 2 ○描写⇨ものの形などを文章などで表現すること。

板書例

3 現代語訳

月日⇨旅人⇨年⇨旅人  
舟の上で生涯を送る人・馬のくつわを引いて生涯を暮らすひと⇨旅人

古人⇨旅の途中で亡くなった人が多くいる

- 私⇨ちぎれた雲のように旅に出たいという思い
- ⇨抑えられない
- 去年の秋⇨川のほとりのあばら屋に住む
- 今年の春⇨白川の関を越えてみたい
- ⇨そぞろ神が乗り移ったようだ
- ⇨取るものも手につかない⇨旅に出たい

解説文

- 芭蕉の時代
- ⇨ほとんどの人が土地に縛りつけられていた
- ⇨旅に出たい⇨あこがれ
- 芭蕉の考える旅⇨空間移動+時間移動
- ⇨人生⇨旅
- ⇨あの世とこの世を旅する
- ⇨死⇨永遠の別離ではない
- ⇨旅人を送るようなもの

重要語句

- くつわ⇨馬にたづなを付けるために馬の口にかませる金具のこと。
- 白川の関⇨白河の関のこと。福島県白河市にあった奈良時代頃から平安時代にあった関所。

板書例

4 対句

●錦江の水⇨深碧色に澄んでいる  
⇨鳥⇨いつそう白く見える

●山の木⇨緑に映える

- ⇨花⇨燃えそうなほど真っ赤
- ⇨今年の春もみるみるうちに過ぎようとしている
- ⇨いつになったら故郷に帰れるのだろうか

重要語句

- 杜甫⇨唐(中国)の時代の詩人。詩聖と称され、李白とともに中国の代表的詩人とされる。



板書例

- 1** (1) 句点の数から判断できる。  
 (2) ① 文節で区切るのに、「ことが」が主語の文節となる。「こと」は補助的な役割を果たす名詞である。  
 (3) 文節で抜き出すので「ものも」となる。「もの」は補助的な役割を果たす名詞である。「もの」の次の「も」は副助詞で同じ種類のものがいくつかわるうちのひとつを表す。
- 2** (1) 「真っ赤な」が「太陽」を、「地平線に」が「沈む」を修飾している。  
 (2) 独立語とは、他の文節とは結びつくことのない文節をつくる語である。独立語となる品詞は体言や感動詞である。設問文では「はい」の応答の意味を表す感動詞が独立語である。  
 (3) 「大いばりだ」の形容動詞が単独で述語になっている。  
 (4) 「ので」が原因や理由を表す接続助詞である。付属語なので単独では文節をつくらできない。「眠れないので」が文節となる。  
 (5) 主語は文節なので「ジョンは」である。「うちの犬の」の部分が「ジョン」を修飾している。
- 3** (1) 連文節とは意味の上で結びついた二つ以上の文節がひとまとまりとなつて、ひとつの文節として働いている部分のことである。「手袋が」が主語なのでそれを修飾する部分が連文節となる。  
 (2) 「落ちる+て+いる+た」である。「落ちる」は動詞、「て」は後に補助用言、この場合には補助動詞につく接続助詞、「いる」は動作の結果を表す意味を持つ補助動詞、「た」は過去を表す付属語で、助動詞「た」の終止形である。  
 (3) 「……狭い道に」の「に」に注目する。場所を表して、その文節が連用修飾語になっていることを示している。

板書例

- 4** (1) 倒置の文になっている。「いっしょに」は「遊ぶうよ」を修飾している。  
 (2) 「お年玉」は体言で、他の文節と関わりをもたない独立語である。  
 (3) 主語は「カレンダーが」、述語は「ある」である。それぞれに修飾語がついている。  
 (4) 「なかなか」は副詞で述語を説明する連用修飾語となっている。  
 (5) 倒置で主語は「君は」である。
- 5** (1) ① ①は「多い」の主部となっている。  
 (2) ④ 「ため」に注目する。「ために」の「に」が省略されたものである。接続語として使用される。「くる」は「ある」「いる」「みる」などと同じ補助動詞として助動詞と同じような働きをする。
- 6** 「この」は連体詞なので自立語である。だから、単独でひとつの文節をつくる。「だ」は助動詞なので付属語である。だから、単独で文節をつくらない。だから、「ところだ」でひとつの文節をつくる。
- 7** (1) 「小さな」は連体詞である。形容詞の「小さい」と区別する。  
 (2) 「どっち」は体言で、名詞である。自立語なので単独で文節をつくらできる。「が」は格助詞で体言についてその文節が主語であることを示す付属語である。
- 8** ① 「キ・こねる」は動作を表す動詞である。  
 ②③ 形容詞は、ものごとの性質や状態を表す語である。活用し終止形は「……い」である。形容詞もものごとの性質や状態を表す。活用し、終止形は「……だ」である。よって、アが形容詞、オが形容動詞である。

板書例

- 9** (2) 補助の文節は、直前の被補助の文節の意味をそえるだけの働きをする文節である。補助の文節が補助語である。この補助と補助の文節がつく文節はひとまとまりの意味をなして、連文節となる。この設問文では「きた」が補助動詞で補助をする用言である。よって、その直前の「生まれて」と補助の関係になっている。
- 10** (2) 設問文の「ない」は形容詞である。エは形容詞「こわい」を打ち消す働きをする補助形容詞の「ない」である。  
 (3) 設問文の「ああ」は連用修飾語をつくる副詞である。ア・ウ・エの「ああ」は感動や応答を表す感動詞である。  
 (4) 設問文の「でも」は接続詞で語の前の内容と逆の内容となることがあつてくる場合に使われる。ア・イ・エは、ひとつの例をあげて同じような内容のことがらを類推させる働きをする副助詞である。
- 11** (1) 注意するのは「過ぎない」の「ない」である。この「ない」は動詞の未然形に接続する助動詞「ない」で打ち消しの意味を表す。助動詞なので用言ではない。用言は動詞と形容詞、形容動詞である。  
 (3) 「その」は連体詞である。ア・ウ・エは終止形が「だ」の形容動詞である。  
 (4) 助詞と助動詞はともに付属語である。どちらも単独で文節をつくることはできない。——線③では、助詞として、格助詞「に」、接続助詞「と」「ば」、格助詞「の」、副助詞「も」があげられる。一方、助動詞は完了を表す「だ」と推量を表す「う」である。推量の助動詞「う」は助動詞の未然形につくので、助動詞「だ」は未然形「だろ」になっている。

板書例

1

- 手紙やはがき、レポートをまとめるとき、手書きか  
← 資料「ふだん、手書きで文字を書く方か」
- はがき、手紙、年賀状  
↓ 手書きが主流
  - ・ 「はがきや手紙などの宛名」「はがきや手紙などの本文」…六割以上
  - ・ 「年賀状の宛名」…半数程度
- 報告書やレポートなどの文章  
↓ 手書きをしない人の割合：四一・七パーセント  
← 手書きをする人の三〇・一パーセントを上回っている
- 平成十六年度から平成二十四年度の「手書きをする」の結果
  - ・ どの項目も約一〇～一五パーセント減少
  - ↓ 昔に比べて、パソコンなどの機器を使う機会が増えたから
- ← 便利な点
  - ・ 書き直しが容易
  - ・ 字の大きさや行がそろおう
- ← ますます手書きをする人が減少するかもしれない

板書例

2

- 放送委員会でポスターを作成したが、放送を聞かない生徒が多いのか  
↓ 正確にはわからないが、毎日の放送に慣れてしまつて、注意して聞いてもらえないことがある  
←
- 全校集会の連絡を放送しても気づかない  
↓ 遅れてくる人や知らない人がいた
- ポスターはどうやって作ったのか、工夫したところは何か  
↓ 委員が案を出し合い、話し合いで決めた
- ← がしている生徒の様子
  - ・ イラスト「おしゃべりをしていて放送を聞きながらしている生徒の様子」
  - ← 問題点をわかってほしいから
  - ・ 標語「呼びかける形」
- ← ポスターを見て大切なことを聞き忘れていないかを意識してもらうため

板書例

3

- 午後にコーラス部の合唱を見たい  
⇨ 音楽室はどこですか  
↓ 階段をのぼってすぐ左側の教室  
←
- 問題点「どの階段をのぼるかはっきり言っていない」
- 体育館では、どのような催しをしているか  
↓ 演劇や音楽の発表が中心  
演劇が終わるまでは観客用のイスには座ることができない  
↓ 終了時刻まで入場口の横のスペースで拝見いただくこととなります  
← 誤り  
ご覧いただくこととなります  
(見ていただくこととなります)
- 美術部の展覧会と放送部の企画を見たい  
↓ 美術部の展覧会「校舎一階北側の美術室」  
放送部「視聴覚室でショートムービーを上映」  
= 美術室を出てすぐ右側にある階段をのぼって、左に曲がり、つきあたりまで行つてください  
← 視聴覚室の前にある階段を下りると体育館にも行ける

板書例

- 1**
- (1) 「何が……何だ」の文である。
  - (2) 「が」に注目する。その文節が主語を表す助動詞であることから、「学習参観日が」が主語である。
  - (3) 「弟に」の「に」に注目する。この「に」は動作・作用の相手を表す助動詞である。「弟」に対して動作・作用をおよぼす使役をあらわす「せる・させる」の助動詞を使う。

- 2**
- (1) 「なぜ」は呼応の副詞である。呼応するのは疑問や反語を表す助動詞「か」である。
  - (2) 「たぶん」は呼応の副詞である。完了の助動詞「だ」の未然形「だろ」と推量の助動詞「う」が入る。
  - (3) 「ください」を呼応させる呼応の副詞「ぜひ」が入る。

- 3**
- (1) 「何が……何だ」の文をつくる。「……いい」は様子を表している。「何が……どうだ」の文になっってしまう。
  - (2) **工**は主語「私は」が動作・作用の主体なので「思い出す」が適当である。自発の意味をもつ助動詞「れる」を使うとすれば、「幼い日のことが」として主語を「ことが」にする必要がある。
  - (3) 「何が……何だ」の文をつくる。「……いい」は様子を表している。「何が……どうだ」の文になっってしまう。
  - (4) 「まるで」は呼応の副詞で、たとえを表す語が入る助動詞「ようだ」の連用形「ように」が入る。
  - (5) 「もしも」は呼応の副詞である。呼応するのは、確定を表す助動詞「た」の仮定形「たら」が入る。
  - (6) 「たとえ」は呼応の副詞である。呼応するのは仮定の逆接を表す接続語となる接続助詞「ても」が入る。
  - (7) ひとつの例をあげて他のものを推量させる副助詞「さえ」や「すら」が入る。

板書例

- 4**
- (1) A 主語は「長所は」なので「正確」では意味がわからない。  
B 「時は」に「だった」は対応しない。「……聞いたのは」を主語にすれば原因・理由を表す助動詞「で」を補って「……電話でだった」にするのがよい。  
C 「これまで」の説明する文節が明確になっっていない。
  - (4) 連体修飾語を表す助動詞「の」をつける。

- 5**
- (1) ひとつの例をあげて、その他のものをきわだたせている。役割をする副助詞「すら」を使った文をつくる。
  - (2) 呼応の副詞「たとえ」が呼応する助動詞「ても」を使った文をつくる。
  - (3) 呼応の副詞「もし」が呼応する仮定の条件を表す助動詞「ても」や「ば」などを使う。
  - (4) 「せる(させる)」は使役の助動詞である。例えば「調整する」という表現の場合、「調査する」という語は名詞「調査」に動詞「する」がついた複合動詞である。「調査する」の未然形に助動詞「せる」がついて使役の意味を示す「調査させる」となった。
  - (5) 受身を表す助動詞「れる」「られる」をつかった文をつくる。例えば、「汚染される」は「汚染する」に「れる」がついたものである。「汚染する」は名詞「汚染」に動詞「する」がついた複合動詞である。この未然形に助動詞「れる」がついて「汚染される」となる。

板書例

- 6**
- (1) 「やむを得ない」の意味は、しかたがないである。
  - (2) 「感心」は心の奥深くまで感動することを意味する。「関心」は興味をもって注意を向けることである。
  - (3) 「いまだに」は副詞で、その意味は、以前と同じ状態が続いて変化のおこらない状態を意味している。
  - (5) 主語「利点は」に対応する述語は「……することだ」である。
  - (6) 助動詞「たり」は同じようなことからの中からひとつ選んで例を示す。「……たり……たり」の型となる。

- 7**
- (1) 「……思ったのは」の「の」は助詞で、「の」のついた語を体言にする働きをもつものである。「……は……だ」の文をつくる。よって、「……ことだ」で文を結ぶのが適当である。
  - (2) 原因や理由を表す語で文を結ぶのが適当である。

- 8**
- (1) はじめに、表現の誤りを直す。助動詞「たり」に注意する。「……たり……たり」にする。また、「……すること」や**7**(1)であつかった「の」に対応する形で文を結ぶことに注意する。次に、文末表現を常体か敬体に統一する。さらに行頭禁則にしたがって句点を文末に置く。そして、最後に、意味のまとまりから判断して、形式段落をつくる。